

神祇志料

栗田寛著述

東京圖書公司

東京圖書公司					
冊	号	架	函	属	類
	110	11	11		

110

神祇志料

栗田寛著述

神祇志料



内藤傳右衛門貳兌

甲府
書林

明治九年圖書局印

いし一葉に葉の根を根の葉と云ふ如く
久しに社を廢し俗を去るは神を祀る
神の地を人の地と爲す事は一國の事
なり福を獲て一民の利幸は行かぬ
心持に神を祀る事一民の利幸は行かぬ
考へ申す事自持に神を祀る事
一民の利幸は行かぬ事一民の利幸は
行かぬ事一民の利幸は行かぬ事



名はつる教^{カミ}みは坂の谷川のせとる^ミ匠^ミは
さる^ミ海^ミの^ミ多^ミ地^ミの^ミら^ミる^ミ心^ミの^ミぬ^ミけ^ミは^ミは
お志^ミ科^ミの^ミち^ミき^ミに^ミあ^ミら^ミく^ミお^ミの^ミま^ミさ^ミら^ミる^ミ心^ミの^ミぬ^ミけ^ミは
ち^ミき^ミの^ミか^ミの^ミら^ミる^ミ心^ミの^ミぬ^ミけ^ミは
い^ミの^ミら^ミる^ミ心^ミの^ミぬ^ミけ^ミは

明治六年八月 伊能親典

神祇志料凡例

一己幼き時父雅文翁語りけくは吾常陸の國は昔 西山^ミの君^ミ大日本史を修
め給ひしより後多くて識者^ミ世に出来て學の道も甚盛りにはなりよ也
其の中よ安積覺三宅緝明栗山憲などは殊に秀傑^ミと云學者にて其日本史
に贊藪中興鑑言保建大説は各見る所ありて其論へ説とも皆いはれた
り故此三人の皇國學の原を開けよ人と云つし其後百數十年の間種々
の博士たちありつれども近くは藤田一正其子彪會澤安豐田亮など
は皆 西山君の御心を心と志と日本史の事にいとつきたる人々に志て
會澤藤田彪豐田の三人の現に今世にあなまは汝よく此三書とをよ
心とめ置て此人々に從て議論^ミを聞かば學ひれ道を辨へむものぞと教
へられらりと學べ力入を遠く性質も頑鈍なりけま其講説を聞き又議
論を聞たれど一つの得る事もなく惜ら月日を送りつる間に負けなくも

彰考館よめとせりて、本史の志表を修むる故由を聞事を得たり。西山君十志の目を立給ひ志より後未だ其を成終る者あらざりしが、景山の君豊田亮を以て編修總裁の事を掌らせめしかば、亮殊に勤勞仕奉りて、兵刑法、食貨、氏族、佛事の志を修め、又職官、禮儀、陰陽の志を修めし人も有つれど、神祇、地理の二志は草稿のみにて未だ成整はざり云り、故甚惜く、竊に神祇の事を考へ見むと思起てより、十年ばかりの間は公務に暇殊に數多の書籍を見まどくり、神祇の事と係りたるをば置高成までに抄録せき、彼と此と較合せ引證考索、其異同を正しつゝ、三度稿を易て、神祇志料十七巻と名づ之を以て自ら足せりと云善と云ふはあらざ、唯此書に因て猶よく増補を改竄もし、猶よく討論ひて、後れ志を修むる一助とせなりなんやは上の聊か、西山君の文運を振起し給へる恩徳に報い奉り、下の亡父の神魂を慰ふに足むじて業ぞらし見ふ人吾心しらびを知らざしと、僧れりじとなそしりそよ、文辭拙劣しとて勿笑ひそよ。

一此書を後世博士の採擇に備ふるが爲に作れるを以て、本史と重複るを厭はざ、又文辭の駁雜を顧みざ、疏謬れる處はと脱誤する事考へて及ばざるを又極めず多からむ、是即史料と名つくる事の縁也。

一神道の明ららざるは、邪説の世に行はるるに依り、邪説を拒くは、道の大原を正にあり、故始め、神聖の國を經營給へる事を述べ、次は

歴朝の 天皇命等神を敬祭る由を記して、其盛衰の來る所を知らしむ、又上世に 聖皇に祭を設け教を施すの義理を知らざれば、今日の時宜を斟酌て之を世に施行ふ事あはざらむ、故恆例臨時に祭儀を記さる。先王天下萬民の爲に、神祇を祭り給へる事を知らしむ、又道を明らかに、教を施すは、愚夫愚婦に至るまで、我皇祖天神の威靈を知らしむるにあり、其威靈を知らしむるは、諸國神社に祭れる神に由縁と、其神の盛

徳大業とて古書に徴し明らむるにあり而も後天下の人みな各神威を畏み奉りて心と頼む處ある時と至りて始て邪説の書を免るべし故神名帳及諸書と因て式内式外の祭神又其功烈及所在の地を記せり諸神の事はみな古典と徴ある者を取り又土人傳説と雖も其事の正確を以て擇て記せり神社の所在は輒近の書を取ら據とて其所在を記せり他日衰廢する神社を再興せし專と要あれば也凡第一卷より第四卷に至るまでを總括編とて譬へば網の綱の如く祭儀と神社の部とハ其目と同じ故互に詳畧あり又一事として二説にわたるは各處に記して照對と便ならむ

一志はもと 朝廷の事を記すと雖も時勢を見らに足らざれば益なし故源頼朝權を執りてより神領等を諸社に奉るを以て必だ各社に下に記さる時勢の變を知らむ

一引用書五百餘部下に載るが如し此ハ皆彰考館所藏本よきり出典を記

せらば煩きと似れども 西山君の尊慮に原ける所也神社の所在は一書にのみありて他書に徴なきは漫りにとらざ社名と村名と相同じく正確と思はるは一書よも之を取れり又二三書共に其説符合へるをハよく考へ正して引記せり毎社某郷某村とありとのみよる餘は記さべき事なきハ一々に引書をいはせ最終の所に記し其引用書の異なるをば毎社みな書名を擧て煩きを厭はせ

一神階の叙日史に漏る考へ難きをハ某位より某位を授くなど記せり式外に神は社字を省き書體を異よせるは内外を分るのみ也又式外ハ式帳の如く郡を以て分ち難し故年月と因て順序をなせり唯畿内ハ大かた郡名を知らざるは此限とあらせ

一各社に下總る年月甲子を以て記せるは神祇の事を慎めら故也とて總括篇よ之を省きしは事ハ明瞭ならむことを要とす故そりし

一神名また社寺の號、姓氏人名の傍に——地名の傍に——年號の左に——
を記し、欄外の事實の端緒と、御世々々の皇謚を掲出せらるれば、覽るに便なら
ざる爲也

一幼き時父の教を受たより以來、其好む處專ら此とあるを以て、漢籍をよみ
漢文のくまをも學び、たうと能思ひを入らしむ。皇國の國典を補ふ
に志あり、故一偏に古典に讀耽り、たうば世の識者には、異學なりとて譏ら
れき、其後又志料を著して、年月を送りつれば、人みな愚物なりとて笑ひぬ
きと、己は唯古へを好む心のみ深く、志て世に求めむも、志を思はざり
げとば、異學も時ありて、彼雷同説は勝れり、愚人も一つに得る事なきと志
をあらせ、玉に比ふべきよ、あらぬと、白玉の人に不、被知、たらせともよし
たらせとせ、吾し、たられば、知らせとせよしと云へれば、此書を然也けりと、
思慰めてあなきと、豊田の總裁も、既よ死されば、神祇の事、議論を聞べき

由なく、又吾先考に、此書を見せ、參らせて、善惡を質問、奉る事も、今いかなは
ざれば、せんまべなく、杖よりぬ八尺の長息とつゝ、其由を聊さか記を置に
なん。

明治四年辛未六月

栗田寛識

神祇志料

引用書目

日本書紀

續日本紀

日本後紀

續日本後紀

文德實錄

三代實錄

類聚國史

日本紀畧

古事紀

舊事本紀

古語拾遺

扶桑畧記

扶桑畧記裏書

帝王編年

歷代皇記

百鍊鈔

皇代記

皇年代畧記

興福寺畧年代記

愚管鈔

聖德太子傳

法王帝說

水鏡

大鏡

大鏡裏書

大鏡裏書異本

一代要記

寬平御記

榮華物語

一名世繼物語

李部王記

本朝世記

天曆御記

小右記

權記

法成寺攝政記

左經記

增鏡

春記

深心院關白基平公記

平記

中右記

長秋記

永昌記

台記

台記別記

兵範記

山槐記

顯廣王記

玉海

吉記

中院通秀公記

三條內相府記

皇帝記鈔

六代勝事記

仲資王記

明月記

東鑑

續世續一名今鏡

業資王記

三長記

玉藻

業廣王記

平戶記

五代帝王物語

葉黃記

岡屋關白記

建曆御記

吉續記

後鳥羽院宸記

伏見院御記

正和宸記

萬一記

花園院御記

後伏見院御願書

元弘日記裏書

神皇正統記

續神皇正統記

元亨元年記錄

花營三代記

於毛比乃末末乃日記

長和大嘗會記

天仁大嘗會記

康治大嘗會記

日吉神輿入洛記

保元物語

平治物語

參考保元平治物語

平家物語

長門本平家物語

太平記

島津家本大平記

天正本太平記

參考太平記

吉野拾遺

豫章記

承久記

櫻雲記

南方紀傳

難太平記

梅松論

園大曆

新國史

律

令義解

令集解

貞觀儀式

延喜式

類聚三代格

延曆太神宮儀式

止由氣太神宮儀式

江家次第

北山鈔

西宮記

本朝月令

新鈔格勅符

年中行事秘鈔

師緒年中行事

建武年中行事

弘仁神祇式本朝月令所引

太神宮延曆儀式解

柱史鈔

拾芥鈔

拾芥鈔古本

政事要畧

類聚符宣鈔

朝野群載

公事根源

師遠年中行事

傳宣鈔

機殿儀式神名秘書所引

太宰府例諸社根元記所引

職原鈔

禁秘鈔

貴女鈔

女院小傳

簾中鈔

齋院記

齋宮記

公卿補任

豐受太神宮禰宜補任次第

禰宜補任至要鈔

新任辨官鈔

太神宮例文

濫觴鈔

今昔物語

古本今昔物語

宇治拾遺物語

古今著聞集

明慧傳

十訓鈔

古事談

長明文字鎖

袋草子

續古事談

清少納言枕草子

奧儀鈔

塵添堦囊鈔

璽囊鈔

塵袋

類聚倭名鈔

運步色葉集

色葉字類鈔

鹿島社文書

神崎社古文書

吉田社文書

織田神社文書 越藩拾遺所引

紀伊國造文書

宗像社文書 神名考所引

東寺文書

東大寺文書

尾張國內神名帳

美濃國內神名帳

隱州神名帳

備前國神明帳

筑後國內神名帳

神名秘書

常陸大國玉神社由緒書

鳴神社文書

伊太祈會社文書

加太社神主前田氏文書

神護景雲四年織田社鐘銘

丹波出雲社文書

伊豆國內神名帳

上野國內神名帳

紀伊國內神名帳

若狹國內神名帳

神名秘書裏書

神祇本源

倭姬世記

寶基本記

美奈宜社傳

薩戒記

常陸風土記

豐前風土記 釋日本紀字佐託旨集所引

豐後風土記

山城風土記 釋日本紀所引

土佐風土記 全上

出雲風土記鈔

但馬國太田文

山城國圖

元元集

熟田社寬平緣起

神鳳鈔

康富記

出雲風土記

肥前風土記

播磨風土記

伊豫風土記 全上

出雲風土記解

丹後國田數帳

常陸國田文

河內國圖

伊賀國圖

駿河國圖

甲斐國圖

下總國輿地全圖

美濃國圖

陸奥國圖

加賀國圖

越中國圖

出雲國圖

隱岐國圖

播磨國圖

讚岐國圖

參河國圖

伊豆國圖

武藏國全圖

近江國圖

信濃國圖

出羽國全圖

能登國圖

越後道程繪圖

石見國圖

但馬國圖

美作國圖

伊豫國圖

肥前國圖

外宮總圖

太神宮內陣圖

日吉社秘密記

諏訪緣起繪詞

足羽社記神名帳
考所引

稻田社緣起

松浦社緣起

北野緣起

梅城錄

荏柄緣起

八幡愚童訓

內宮總圖

外宮圖樣

大內裏圖

日吉社記

若狹一宮緣起

大倭本記釋日本
紀所引

丹生明神祝詞

管家傳記

天滿官託宣記

宇佐八幡託宣集

勸修寺緣起

飛鳥田社應永廿五年上梁文山城志
所引

延文四年今官社解文諸神記所引

大三輪社鎮座次第

春日社記

花山院宗像社記

河内西琳寺文書

神宮雜例集

日本一宮記

太神宮雜事記

公卿勅使記

弘安九年太神宮參詣記

小朝熊神鏡沙汰文

承正中香取祭禮圖

立野神社上梁文

承萬元年記

長寬勘文

熊野畧記

承曆元年宣命神宮雜例集所引

伊勢年中行事

承正四年藤内社棟札

建久假殿遷宮記

寬正遷宮記

高良社文書

康曆遷宮記

嘉祿山口祭記

承仁注進狀

承正記

頭工日記

請屋日記

神事供奉記

柳葉日記

春日神木入浴記

承和大嘗會記

承享大嘗會記

伊勢公卿勅使例

大倭社注進狀

諸社根元記

諸神記

春日驗記

春日小社記

佐佐木官勘文

二十二社注式

神名帳頭注

二十二社本緣

神階記

官主秘事口傳

諸社大事

出雲大社記

太宰府天滿宮記

賀茂注進雜記

鹿島志

香取志

八幡本記

神名帳考證

神名帳考

神名帳土代

神名帳打聞

神社考

神社啓蒙

伊勢神名帳再興

太神官神名畧記

尾張國內帳集說

尾張式社考

參河國式社考

遠江式社考

常陸廿八社考

水戸領鎮守帳

美濃式社考

若狹國官社私考

加賀式社考

備前式社考

備中神名考

安藝式社考

讚岐廿四社順拜記

廿四社參詣記

土佐式社考

壹岐式社畧記

大内裏考證

神祇官圖

神祇官古圖

神祇官建圖

神泉苑所傳圖

宮城古圖

山城南勝志

雍州府志

畿内志

國華萬葉記

和州舊蹟幽考

大和名所圖會

伊賀名所記

伊賀考

伊水溫故

神境紀談

勢陽雜記

柘原溫泉記

倭姬世記考

志陽畧志

海邦名勝志

三河國二葉松

遠州一統志

駿河國志

駿河新風土記

豆州志

甲斐名勝志

裡見寒話

伊豆海島志

房總志料

常陸志料

水戶領地理志

東極雜記

常陸國誌

談海地志

水曾路名所記

佐々木舊迹見聞錄

都名所圖繪

伊勢參官名所圖繪

美濃明細記

濃陽行記

巖邑府志

飛州志

信濃地名考

水曾路記

上野國志

下野國志

下野風土記

白河故事考

奥州紀行

封内風土記

奥羽觀迹聞老志

磐城風土記

磐城志

會津風土記

會津舊事考

三山雅集

東國旅行談

若狹國志

越藩拾遺

越中舊事記

越後名勝志

佐渡事畧

丹波志

丹後宮津志

但馬考

因幡民談

因幡志

懷橘談

八重葎

隱州視聽合記

播磨名跡志

作州風土畧

備前國志

備中集成

藝備國郡志

巖島道芝記

南紀名勝志

陽國名跡志

紐伊國名所圖會

讚州府志

筑前續風土記

宗像事跡考

筑後志畧

筑後地鑑

西行雜錄

筑紫巡遊目錄

鹿兒藩名勝畧

霧島山地方圖

西遊記

神代山陵考

京都廻記

大和廻記

吾孺路記

有馬温泉記

木曾路記

行囊鈔

一宮巡見記

武藏地名考

神拜舊祠記

山吹日記

四神地名錄

和漢三才圖會

和爾雅

新撰姓氏錄

南游紀事

尊卑分脉

中臣本系帳

鳴縣主系圖

皇胤紹運錄

松尾社司系圖

丹生祝氏文

秦氏本系帳
本朝月令
等所引

中臣系圖

藤原系圖

佐々木系圖

荒木田系圖

度相系圖

伊香氏系圖

清原系圖

出雲國造系圖

阿蘇大官司系圖

和氣系圖

多米氏本系帳政事要畧所引

高橋氏文本朝月令所引

津守系圖

菅原系圖

紀伊國造系圖

河野系圖

中原系圖

高階系圖

小塞圖志

拾遺和歌集

萬葉和歌集

清輔朝臣集

後拾遺和歌集

金葉和歌集

千載和歌集

兼盛集

扶木鈔

神祇官年中行事歌合

新撰六帖

中務內侍日記

袖中鈔

河海鈔

八雲御鈔

永久四年百首

坂土佛太神宮參詣記

多氣窓螢

鳴長明海道記

親行道記

堀川院後百首

都之裏

回國雜記

長明無名鈔

堯惠北國紀行

道行夫理

楊鳴曉筆鈔

元亨釋書

天台座主記

大和葛寶山記神祇本源所引

東大寺要錄

高野大師遺告

山家要畧記

叡岳要記

毘沙門堂所藏記

廣隆寺來由記

承平七年室生山寺奏狀

改曆雜事記

元弘元年劔璽渡御記

船氏墓誌

峯相記

關東評定傳

本朝文粹

姓靈集

姓靈集便蒙

寺德集

東寺長者補任

東大寺戒壇院神名帳

革曆勘文

詞林採葉鈔

對馬國卜部龜卜次第

園部狀

人車記

更科日記

續本朝文粹

忠富王記

羅山集

林塘集

釋日本紀

日本紀纂疏

新安手簡

契冲書簡

古事記傳

玉葛間

元史

仙覺万葉鈔

日本紀通證

擁書漫筆

閑田耕筆

古史傳

北史

東國通鑑

五雜俎

神祇志料總目

初篇

○ 第一卷

神代事實
自天地開闢至鵺
葦草葺不合命

○ 第二卷

神祇沿革
自神武天皇朝
至平城天皇朝

○ 第三卷

神祇沿革
自嵯峨天皇朝
至近街天皇朝

○ 第四卷

神祇沿革
自二條天皇朝
至後小松天皇朝

○ 第五卷

恆例臨時祭儀

內侍所

同御神樂

大嘗祭 祈年祭

月次祭 新嘗祭

大殿祭 神衣祭

神嘗祭 大忌祭

鎮華祭 相嘗祭

鎮魂祭 鎮火祭

道饗祭 祈年穀祭

八十島祭 御贖祭

大神室使 大祓

祈雨神祭 名神祭

霹靂神祭 遣蕃國使時祭

却送蕃客神祭 附疫神祭 雜祭

二篇

○第六卷

神社 官中卅六座 京中三座
山城國一百廿二座

附式外諸神

○第七卷

神社 大和國二百八十六座 河內國一百十三座
和泉國六十二座 攝津國七十五座

附式外諸神

○第八卷

神社 伊賀國廿五座 勢伊國二百八十五座
志摩國三座 尾張國一百廿一座

附式外諸神

○第九卷

神社 參河國廿六座 遠江國六十二座
駿河國廿二座 伊豆國九十二座
甲斐國廿座 相模國十三座
武藏國四十四座 安房國六座
上總國五座 下總國十一座
常陸國二十八座

附式外諸神

○第十卷

神社 近江國一百五十五座 美濃國卅九座
飛驒國八座 信濃國四十八座

上野國十二座
陸奥國一百座
附式外諸神
下野國十一座
出羽國九座

三篇

○第十一卷

神社 若狹國四十二座
加賀國四十二座
越中國卅四座
佐渡國九座
附式外諸神
越前國一百廿六座
能登國四十三座
越後國五十六座

○第十二卷

神社 丹波國七十一座
但馬國一百卅一座
附式外諸神
丹後國六十五座
因幡國五十座

○第十三卷

神社 伯耆國六座
石見國卅四座
附式外諸神
出雲國一百八十七座
隱岐國十六座

○第十四卷

神社 播磨國五十座
備前國廿六座
備後國十七座
周防國十座
附式外諸神
美作國十一座
備中國十八座
安藝國三座
長門國五座

○第十五卷

神社 紀伊國卅一座
阿波國五十座
伊豫國廿四座
附式外諸神
淡路國十三座
讚岐國廿四座
土佐國廿一座

○第十六卷

神社 筑前國十九座
豐前國六座
肥前國四座
日向國四座
薩摩國二座
對馬島廿九座
筑後國四座
豐後國六座
肥後國四座
大隅國五座
壹岐島廿四座

○第十七卷

宮殿之制 神祇官 伊勢神宮
出雲大社

神官

神官把笏

叙位

太占

神祇志料第一卷

○目錄大意

門人笹島彰謹記

此卷とは道に大原は天神と起り政の根本を天神に起る事と知らぬことを
 の意にて先づ天地の始三神造化の首を作給へる事より始り神々相承
 て其功を輔相給ひ伊邪那岐命伊邪那美命天神の詔を受て國土を造堅め
 萬物の祖神を生成し生の終り三柱の貴子を得て御事任し給ひて事天照
 大御神は高天原に御在坐して六合に照臨し顯見蒼生の爲に衣食住に原
 を開き給ひ八百萬神は各其明靈に徳もて大御神に仕奉り化育に功を燮
 理給ひてが素盞鳴尊ハ御任の天下を治め給はせ勇悍安忍にして衣食
 住を善ふ御所爲れみ坐を事御怒りまゝ天窟戸に隠り給ひしかば思
 金神の思慮よよりて中臣忌部の諸神其衣食住の物を能成と整へて大御
 神の御意を取奉り又種々招禱の方を謀とより神祭の禮典始り其御怒

此解させ御在し坐に至りしが素盞鳴尊ハ其罪之因て千座置戸の祓物を
出と諸神に逐はれ其祓除の功驗にて御心清々しく平穩になり給ひ韓國
よ天降り木種と播し吾御子の所治國と浮寶あら受ハ不善と詔て其子五
十猛神を率て還て大八洲國內に木種を殖生し八岐大蛇と屠て百姓の害
を除き神劍を獲て天上と獻り比類なき衣食住の事共を一向と力め整ひ
高貴大神とならせ給ひ終て根國よ往坐しより天下ハ主なき國の如くな
りしが其五世孫大己貴神此國土を經營め醫藥禁厭の方と定め威徳を天
下よ蒙らるめ大國主神となりて強暴の神どもを治め給ひたば天神此
國を修理固成と詔へ給結局と聞ゆるに大御神と素盞鳴尊と御誓の間よ
生坐る御孫此命の天降り坐て此國土を治め給へ給事即伊弉那岐命の素
盞鳴尊と天下を治看せと詔別坐る事の結局よして甚奇びと妙なるも此
時に當りて大國主神吾は幽事を治む皇御孫命は顯事を知食せと申とて

此國を遊奉り并築宮に鎮坐るは顯幽の分界なるが大御神の御子天穗日
命として其祭祀を掌らしめ又大御神御手つから三種の神器を御孫命に
授けまゐて天日嗣の隆まとも事天地の共先窮なるべとと詔ひ又齋庭の
穂と中臣忌部二神と給て御孫命に御れと詔まよく筑紫に臨幸まゐ
て神器を同殿とませ奉り又大嘗祭を始め給ひ三御世の間其國と都と給
ひし事を記とばた今の現に人み那の安く穩よ在經るは即天神の賜物な
る事その天神は萬物の在の悉作成る世人に賦與給へる恩資ます事夫の
みならせ今此天皇大命は即大御神の天日嗣にまゐる人み那は何れを天神
地祇の御裔なまば本よ報い始に反り已が祖神の天祖天孫に仕奉りしが
如く天皇大命と忠誠を盡し神々を敬ひ奉るべき義理をも含蓄と記され
たれば觀る人其心しる能讀能味ふ可物也かし

神祇志料卷之一

神祇一

常陸 栗田寛 編輯

道元大原は天神に起り、政の根本を、又天神に起り、其天神の徳は高く貴く、奇く妙にして、固より凡人の智も、思ひ量るべきにあらず、庸人か言以て稱奉るべきよあらぬと、謹て神典に載る所を考ふるに、天地の始に生坐て萬物の産靈を主宰給ふ神を天御中主神、高皇産靈神、神産靈神となん申奉る、其後神々相繼て伊弉諾尊、伊弉冉尊、尤靈威の徳ましまして、其生坐る御子神、みな萬物の祖神となり給ひき、故天祖天照太御神をして高天原を治さめ、月讀尊をして、滄海原を治さめ、素盞鳴尊をして天下を治しめ、給へるを以て、群神又皆其職掌に仕奉り、綿津見神は海を治め、瀬能賣神は水を掌り、久久能智神は木を掌り、大山祇神、鹿屋野比賣神は山野の事を掌り、志那都比古神は風

を掌り、迦具土神の火を知り、保食神の穀物を掌り、思金神の深智と運らし、天
 兒屋命太玉命の神祭の事を掌り、手力雄神の其勇力を致し、武御雷神経津主
 神の征討の事を預り、各其道を盡給ひしかば、天地の萬物ありの悉よく育
 養れ、天下の蒼生みな其深仁厚澤を潤ふ時は、道の大原天神に起る者を言を
 俟て、知るべき也。天祖高天原に坐して、既して神衣を織坐し、新嘗、聞食て、本に
 報ひ神を祭ふに禮を始め、又皇孫命の天璽の神寶を授け坐して、威靈を寶鏡に
 寓給ひ、中臣忌部二神として、神籬を起樹、皇祖天神を齋奉らめ給ふを以て、八
 十萬神各天業を輔贊勤しみ、皇孫命は仕奉り、神と人と相遠からざり、祭と政と
 二つある事なく、皇祖天神を祭ふの禮愈著く、君と臣との道正しく、儀よ
 して、假初も天位を窺竊奉る者なく、寶祚を無窮に傳給ふ時は、神聖の大道
 斯に至りて、益明らか也。神武天皇天祖の威靈を依り、天神の大教に従て、兵威を
 耀し給ふに、兇賊忽と誅なきも、禮原と都三給ふ時、靈時を建て、皇祖天神を

り、本を報ふるの道と盡し給ひしかば、天下大に治りぬ。崇神天皇最も神祇を
 敬ひ、天社國社を定め、神地神戸を置く時は、災異忽に滅く、蠻夷貢物を捧奉り、
 垂仁天皇其御心を繼坐して、天祖の神を伊勢に崇奉り、兵器を以て神幣と爲給
 ひき、此の其神祇を崇め奉るのみとあらざり、皇神を崇み給ふが中、兵の道を
 自らともらひ、大威稜を振起し坐す中、又神祭の禮儀を備りてありけり。
 故倭建命は草薙劍を賜りて、東國を伐給ふに、蝦夷ども所に順服奉り、神功皇
 后神誨を蒙りて、新羅國を攻るに、韓人御奴と仕奉りき、是に由る之をみれば、
 神祇を敬ひて、兵威を耀し、青雲の霧く極み、舟艦に至り留る限り、狹國は廣く、
 險き國は平けく、天地の間に生とま生る者をして、天神の威靈を蒙らざる者
 なららしむるは、實に天祖天神の神慮よきて、遠天皇命の承繼し給ふ大業の
 本也。けり、初皇孫命天降りしより、瑞垣の朝に至るまで、天祖天神天皇と宮殿
 を同じ、中臣忌部は世々天皇を翼け、神事を掌り、或は皇子を以て、忌人と云、或

は大臣を以て齋主とて神と人と相遠からざ祭と政と二つある事なく天皇命ハ實に天津日繼に坐々々天祖を崇め給ふ事天日を仰奉るに異なる事なく其寶鏡を齋奉る事天祖に親とく仕奉るが如くな事を以て臣連伴造天神に裔地祇に胃とある者皆其祖神を忘るゝ事なく齋を祭りつゝ各もかのも其祖神の天祖に仕奉りて職業をして皇孫命に仕奉る時は朝廷よも其功烈ある八十萬神等を諸國に祭らとめ給へるを以て祖先を祭るの禮天下に行はれき是故に道に大原は天神に起り政に根本を又天神に起れりといふ也上代の天皇命うくればさまに神道を以て國體を立て神命を奉りて政を行ひ神意を本とて教化を施し天下を治め和を坐し三かば下が下まで紛亂をことなく各其本を忘るゝ事なく皇神を敬ひて心に穢きくまをわらざ天皇命に大御心を心として現人神と仰奉り言騷ぐ禁人さへも可畏天皇に仕奉りて國內に惡風荒水の傷ひなく夷狄盜賊の寇なふ事あらざりといふ天神

の御心を大御心とて神世の隨に大簡よまつりごち給へる故こととはといじもいとを長く資き大御世の状よぞありけり然るに欽明天皇に朝佛法中國に渡り參來るより蘇我稻目等豐聰耳皇子と心を合せ物部中臣の二氏を傾けて大よ之を崇めつるを以て古の典禮悉く壞れ種々の禍事繁興り天下の民ども甚亂りがはしくなりをてゆき終に其本を忘るゝに至れり故孝徳天皇始て制度を改め其弊を矯正し天智天武に二御世にも其を受繼して神祭の典をも定め給ひ文武天皇の朝に神祇に合典を設け醍醐天皇延喜の式を定るよ及て天下大小神社の差祭幣多小の數又大に備れり唯中世以來古へ民を治るを本として神を敬ひ萬づを齋清まはり種々の物を獻り琴ひき笛吹歌舞して易簡に祭りつゝ御事を忘るゝ何事を神とのみ願み奉りて御祭繁く瑣細しく天日嗣の尊きを以て自ら三寶奴と名のり給ふが如き事とへ出來つゝに合せて佛氏の法國內に蔓延りし間に行基最澄空海等が奸僧相

繼て本地垂跡の說を唱へて長く天祖天神を傳へ奉りてより延曆園城等の僧徒動もそれば神威を假りて朝廷を劫奪する朝廷に唯其請を許さ給ふのみよして大に皇神を敬ひ給ふ道と振起して彼が邪謀を挫き儲く雄々しき皇威を耀え其勢を防ぐ事ありは是以後世ト都兼俱が如き神道の名を託げあるにもあらぬ説を構造り明神を蔑し朝廷を敗率りて後邪説日熾とて神體なる道日に暗く我皇祖天神の教を設け政を施し給ふ深意を辨難きに至り然らあきと天祖天照大御神の御光ハ少くも曇り給ふ事なく皇孫命は今の現と天璽を持し給ひ天日嗣知看て高御座より大座ませば直く正なき其神道は動かざりけり然らば古昔の禮典を修め神聖の大道を明かさんと明神を敬ひて淫なる祠を翻げ百姓の心を一本にたて太平の基を建ふるは又朝廷の政に在のみ蓋遠とめらぎの官職を定め政を施し給ふも軍を興し禮儀を行ふもみな神祇を本とし給ふ時ハ後ハ天下を治る

天地初發

者考を斯よ致さざるべけんや故今謹て上世の傳を據り神祇の本原を述べ次に列聖神を敬ふの義を明らし祭祀の禮典を記し又天下大小の神及式外諸神の史文令式に載る者悉く篇に著し神祇志を作ら

天地の初發の時高天原に成坐る神の名は天之御中主神次に高御產巢日神是ハ皇親神留岐命よ坐り次に神產巢日神此は皇親神留彌命よ坐り高皇產巢日神亦高木神と申す此三柱神は實に造化の元始となし給ひ並獨神成坐

て御身を隠し給ひき古事記日本書紀一書次に國祖く浮胎の如くして水月など漂蕩へる時葦牙の如萌騰る物に因て成坐る神の名ハ宇麻志阿斯訶備比古遲神次に天之常立神○按日本書紀一書に天常立尊此二柱神を獨神成坐り御身を隠し給ひき上件五柱神ハ別天神也古事次に成坐る神の名ハ國之常立神亦ハ國狹立尊と申す○按日本書紀此神ハ次ハ國次ハ豐雲野神亦豐斟淳尊又豐國主尊又豐組野尊と申す亦豐香節野尊又浮經野豐買尊又

神世七代

豊國野尊亦豊靈野尊と申す此二柱神も獨神成坐て御身を隠さ給ひき次
 と成座る神の名は宇比地通神妹須比地通神亦湊土根尊沙土根尊と申す次
 に角杵神妹活杵神次意富斗能地神亦大戸摩彦尊又大富道尊と申す妹大
 斗乃辨神亦大苦邊尊亦大戸摩姬尊又大富邊尊と申す次に湊母陀琉神妹阿
 夜訶志古泥神亦吾忌樞城尊又青樞城根尊亦吾屋樞城尊と申す次に伊邪那
 岐神妹伊邪那美神一説には國常立尊の子天鏡尊の子天萬尊其子沫蕩命則
 此二神を生坐りとあり然れど書紀本文及古事記共に此説なし故今取らば
 又按妹とハ古へ夫婦なまれ兄弟なまれ他人とおにまれ男と女と相並ぶ時
 其女を指て云ふ稱よて此なる男女の神を其父母を
 同じくぞふの謂といふべからば姑附考に備ふ上件國之常立神より以
 下合せて神世七代と申す此はみな高天原なまなまして三神造化の功を替
 成給へる神等也古事記日本書紀大意於是天神諸神命以て伊邪那岐命伊邪那美命二
 柱神に此漂蕩へる國を修理固成と詔て天瓊戈を賜ひて言依し給ひき故二
 柱神天浮橋と立きて其瓊戈を指下して滄海を畫探り湊能基呂島を獲給ひ

夫婦之道

其島に天降り坐て其天瓊戈を其島に衝立て國中の御柱とし其天以下據舊
 紀引八尋殿を見立て共に住給ひき爰に伊邪那岐命其妹伊邪那美命に吾と
 私記と國土生成むと思ふは奈何と詔へば伊邪那美命然善むと白給ひき伊邪
 那岐命然らば此御柱を行廻逢て美斗能麻具波比せなと云期て乃汝は右よ
 り廻逢へ我は左より廻逢むと詔給ひ約竟て廻坐時伊邪那美命先阿那通
 夜志愛衰登古衰と唱給ひ後に伊邪那岐命阿那通夜志愛衰登賣衰と詔給ひ
 き各詔ひ竟て後に伊邪那岐命悅給はとて其妹と吾ハ男に在れば先唱ふ
 べき理也如何女言先立やと不良と詔ひて久美度と興と御子蛭子を生給
 ひ次に淡島を生給ひき此は並子の列に入らば於是二柱神議り給ひつらく
 今吾生りし子不良なほ天神に御許に奏すべと詔ひて即共に參上りて具
 に其状を白して天神に命を請給ひき爾天神の命以て太兆と相と教給ハ
 く女と言先立とに因て不良還降りて改め言と詔給ひき故二柱神即返降坐

大八州出生

て改て伊邪那岐命は左より伊邪那美命は右より彼國之御柱と往廻りて遇給ふ時之伊邪那岐命先妍哉可愛少女衰と唱給ひ後之伊邪那美命妍哉可愛少男衰と和言き如此言竟て御合坐之即大八洲國を生給き國毎に各名あり日本書紀淡道と穂之狹別と云次に伊豫と愛比賣といひ讚岐と飯依比古と云ひ粟を大宜都比賣と云ひ土左と建依別と云ふ伊豫以下四國と合せ次に隱岐と天之忍許呂別と云ひ次に筑紫を白日別豐國と豐日別肥國を建日向日豐久士比泥別熊曾と建日別と云ふ筑紫以下四國合次に伊岐と天比登都柱と云ひ次に津島を天之狹手依比賣と云ひ次に佐度島と云ふ按次に大倭豐秋津島を天御虛空豐秋津根別と云ふ凡此十四國ハ所謂大八島國也然後還坐し時生坐る吉備兒島を建日方別と云ひ小豆島と大野手比賣と云ひ大島と大多麻流別といひ女島と天一根と云ひ知訶島と天之忍男と云ひ兩兒島を天兩屋と云ふ既之國生竟る更に生坐る神名ハ大事忍男神次に石土毘古神次に石巢比賣神次に大戸日別神次に天之吹男神次に大屋毘古神次に風木津別之忍男神○按日本書紀大事忍男神以下七神次に海神名大綿津見神次に水戸神名速秋津日子神速秋津比賣神を生坐き此速秋津日子速秋比賣二神河海に因て持別て生坐る神名沫那藝神沫那美神次に頼那藝神次に頼那美神次に天之水分神次に國之水分神次に天之久比耆母智神並て八神日本書紀此八神次に風神名志那都比古神次に志那斗辨神を生坐も亦名天之御柱命國之御柱命と申も次に木神久久能智神次に山神大山津見神次に野神鹿屋野比賣神亦名は野椎神を生坐も志那斗辨神亦名據日本此大山津見神野椎神二神山野と因て持別て生坐る神名は天之狹土神次に國之狹土神次に天之狹霧神次に國之狹霧神次に天之閻戶神次に國之閻戶神次に天戸惑子神次に大戸惑女神并て八神次に鳥之石楠船神亦名天鳥船神次に大宜都比賣神を生坐き古事記舊事本紀○按日本書紀爰に伊邪那岐命伊邪那美命二

諸神生成

次に石巢比賣神次に大戸日別神次に天之吹男神次に大屋毘古神次に風木津別之忍男神○按日本書紀大事忍男神以下七神次に海神名大綿津見神次に水戸神名速秋津日子神速秋津比賣神を生坐き此速秋津日子速秋比賣二神河海に因て持別て生坐る神名沫那藝神沫那美神次に頼那藝神次に頼那美神次に天之水分神次に國之水分神次に天之久比耆母智神並て八神日本書紀此八神次に風神名志那都比古神次に志那斗辨神を生坐も亦名天之御柱命國之御柱命と申も次に木神久久能智神次に山神大山津見神次に野神鹿屋野比賣神亦名は野椎神を生坐も志那斗辨神亦名據日本此大山津見神野椎神二神山野と因て持別て生坐る神名は天之狹土神次に國之狹土神次に天之狹霧神次に國之狹霧神次に天之閻戶神次に國之閻戶神次に天戸惑子神次に大戸惑女神并て八神次に鳥之石楠船神亦名天鳥船神次に大宜都比賣神を生坐き古事記舊事本紀○按日本書紀爰に伊邪那岐命伊邪那美命二

三柱貴御子

神共に議りて詔給はく、吾は既に大八洲國及山川草木の神を生り、何を天下の君と坐す神を生ざらめやと詔給ひて、日神を生坐し、天照大御神と申せ、亦御名を大日靈尊と申せ、亦天照大日靈尊と申せ、次に月神を生坐し、月讀命亦名月弓尊と申せ、次に建速須佐之男命を生坐し、日本書紀故其天照大御神賢性に光華明彩く坐て、六合に照徹らせり、故二神大く歡喜とて詔く、吾子多なれども、若此靈異なる子ば不在此國と留むべきに非と詔て、即其伊弉那岐命の御頸珠の玉緒珍々然取ゆらぎして、天照大御神に賜て詔く、汝命は高天原を所治と事依とて賜ひき、故其御頸珠の名を御倉板舉之神と申せ、即其以下是時天地相去と遠からざりしかば、天之御柱を以て、天上と舉奉り給ひき、次に月讀命を其光彩日神に亞て、明麗く坐し、故詔く、汝命は滄海原潮之八百重、按古事記夜之を知せと事依と給ひて、天上に送奉りき、次に建速須佐之男命に詔曰く、汝命は天下、海原と作るを知らせと事依し給ひき、日本書紀及一書〇

迦具土神

神託尊吾御高珍子を生まむと詔ひ、左手に白銅鏡を持給ふ時に、大日靈尊生坐し、右手に白銅鏡を持給ふ時、月弓尊生坐し、又首を廻りて、顧みれば、間に化坐る神を、素盞鳴尊と申せとあり、古事記書紀一説、伊弉那岐命、阿波岐原御を洗給ひ、時、月讀命、御鼻を洗給ひ、三柱建速須佐之男命生坐り、故大く歡ばとて詔く、吾は御子生るる生の終、三柱貴子を得たりと詔ひき、とをあり、今姑く書紀初三神造化の原始を成し給ひ、とより、天照大御神、高天原を治と正文より従ふ、初三神造化の原始を成し給ひ、とより、天照大御神、高天原を治と食に至る、悉に其造化の功を成整ひて、天地萬物の化育を掌り給ひき、故別天神と同じく、天神と申せ奉り、又天津日繼治とめ、天皇命の大御祖神と坐すを以て、即天祖とも申奉りき、日本書紀古事記一説に曰、伊弉那美命、麻奈弟子に火産靈神を生給て、御身焼えて石隠坐て、伊弉那岐命之夜は七夜、晝は七日、吾を勿見給ひ、我我那勢命と白し給ひき、此七日は不足て、其隱坐事奇とて見そなはず時、火を生給て、御身焼えて病臥し、悶熱懊惱坐し、時に金山毘古神、次に金山毘賣神を生坐し、悶熱以下參取日本書紀一書古事記而して白し給はく、吾我那勢命の吾を見給ふなど、白せと、吾を見阿波多志給ひつと申給て、我那勢命は上

津國と知看べし吾ハ下津國と知らむと白し、復石隠給て與美津枚坂よ至坐て所思食さく吾那勢命の所知食上津國と心惡子を生置て來ぬと詔給ひて返り坐て更に御子水の神土の神天吉葛川菜を生給ひ此心惡子の心荒びそば水ノ神匏土ノ神川菜と持て鎮奉れと事教悟し給ひき、延喜其水神は彌部波能賣神と云ひ土神は波邇移麻比彌神亦名は波邇夜須毘賣神と云ふ亦名據古事記舊事本紀○按二書波邇夜須毘賣神古神波邇夜須毘賣神二神と云日本書紀一書土神を埴安神と云ふとあり姑附て考と備ふ故是火産靈神其波邇移麻比彌神に娶て生坐る神名は和久産巢日神此神の頭上に蠶と桑と生り臍中に五穀生りき、日本書紀一書○按古事記此神を以て伊弉故今之此神の御子を豐宇氣毘賣神亦登由宇氣神と申と、古事即伊勢大御神の御饌都神等由氣大神也、止由氣大神故伊弉那美神は火神を生坐るに因て遂に神避坐ぬ故爾伊弉那岐命詔はく愛しき我汝妹命や子の一木に易つる哉と詔ひて御枕方と匏匏御足方と匏匏て哭給ふ時に成坐る神名は泣澤女

神此は香山之麻尾之樹本に坐神也於是伊弉那岐命御佩せる十拳劔を抜て迦具土神を斬給ふ時其御刀の前と着る血湯津石村に激り就て成坐る神名は石拆神次に根拆神次に石筒之男神○按日本書紀一書に磐筒男命磐筒の兒磐筒男神磐筒此は徑津主神の祖也次に御刀の本に着る血を激越着て成筒女神と云り、此は徑津主神の祖也次に御刀の本に着る血を激越着て成坐る神名瓊速日神次に樋速日神此者建御雷之男神の祖也○按日本書紀子瓊速日神其子瓊速日神其子次に御刀の手上に集る血手俟より漏出て所成武甕槌神とあり今之に従ふ、次に御刀の手上に集る血手俟より漏出て所成神名は聞淤加美神○按日本書紀一書此神次に聞御津羽神古事記參取日其殺さえ坐と迦具土神の御骸に成坐る神名は正鹿山津見神於藤山津見神與山津見神聞山津見神志藝山津見神羽山津見神原山津見神戸山津見神古事按日本書紀一書に大山祇中山祇麓山是時の血激瀝て石礫樹草と染る此草能離山祇五神を擧て本書と稍異なり、木沙石の自ら火を含ま縁也、日本書紀一書故斬給へる刀名は天之尾羽張と云ふ亦名ハ伊都之尾羽張と云ふ於是其妹伊弉那美命を相見まく思ほとて貧泉國夜見國

追往坐き故其殿騰戸より出向坐時に伊邪那岐命語らひ給はく愛き我汝
 妹命吾汝と所作と國未だ作り竟たれば還坐ぬと詔ひき爾伊邪那美命答
 へ給はく悔なき哉速く來坐とて吾ハ黄泉戸喫ふつ然れども愛我那勢命入
 來坐事恐ければ且黄泉神と相論はむ我を莫視給ひとて白して其殿内
 入坐る間甚久しくて待難給ひき故一火燭して入見坐時に宇士多加禮斗呂
 呂岐豆八種の雷神成居き於是伊邪那岐命見畏て逃還り坐時其妹伊邪那美
 命吾に辱見せ給ひつと言し給ひて即豫母都志許賣を遣とて追とめ又後に
 は其八雷神に千五百の黄泉軍を副て追とめき爾御佩る十拳劍を拔て後手
 と布伎つゝ逃來坐るを猶追て黄泉比良坂の坂本に到時其坂本なる桃子
 を取て待擊給ひしかば悉逃還りき爾伊邪那岐命桃子に告給はく汝吾を助
 ちが如葦原中國と在ぬ宇都志伎青人草の苦瀬と落て苦まむ時に助け
 てよと詔ひて意富加牟豆美命と云ふ號を賜ひき古事記此桃を以て惡神を防

ぐ事の縁也

日本書紀一書

最後に其妹伊邪那美命身自ら追來坐き即千引石を其黄

泉比良坂と塞て其石と中と置て各對立とて事戸を度と時に伊邪那美命言
 給はく愛なき我那勢命如此爲給はく汝國の人草一日に千頭殺とて白
 と給ひき爾伊邪那岐命詔曰く愛なき我那邇妹命汝然爲給はく吾はや一日
 に千五百産屋立てとて詔ひき是以一日に必千人死一日に必千五百年生
 と古事記さきに伊邪那岐命彼國より出返らむと爲給ふ時に直に黙歸り給と
 て盟給はく族離む族に負とて詔ひて乃唾給ふ時に成坐る神名速玉之男神
 次に掃給ふ時と成坐る神名ハ泉津事解之男神凡二神坐と又雷神追來時に
 此より來莫と詔ひて即其御杖を投棄給ひき其御杖と成坐神名は來名戸之
 祖神と申し亦岐神とを申す○按古事記伊邪那岐命御襖の時御杖と成坐る
 神名衝立船戸神とあるは本書及延喜式祝詞と
 據ふ蓋岐神也然るをかく記せし事ハ御杖を
 投棄と云ふ因て混れと傳也姑附て考と備ふ
 於是伊邪那岐命復詔曰く始
 め族とて悲みとて思をしつるは吾怯也けりと詔給ふ時と伊邪那美命泉

道守者と白と云め曰く吾汝と已に國を生き、奈何更に生まく欲せむ吾ハ此國に留りて共に還らじと白と給ひき、是時、理媛神も白と事あり、伊邪那岐命聞して善給ひ、乃散去き、日本書紀一書故其伊邪那美命を黃泉津大神と申也、亦道及しと依て、道敷大神と云り、古事記此神は紀伊國熊野之有馬村に奉りき、土俗此神の魂を祭ふに、花ある時ハ花を以て祭り、又旗を立て、笛吹、鼓打、歌舞て祭る、日本書紀一書○按本書伊弉冉尊焦えて化去、また終矣、又伊弉冉尊其妹を見まく欲とて、乃殞歛の處に坐とあるハ、みな身死給へる事なれど、一書に火産靈を生給ふ時、子の爲に焦えて神退矣、其神退まるとも、返坐して、更に水神云々四種物を生給ふ、又一書に伊弉冉尊伊弉冉尊の所在處に逐至り坐て、語ふなどあるを合考ふるに、神避神退は共に石隠りと云ふらひも死給ひと、後の事にあらざるハ、此一書にて著と、故其葬處と此に廻らとて記せり、姑附又曰、出雲國と伯耆國との塚、比婆之山に葬と奉ると云ふ、後考と備ふ、又曰、出雲國と伯耆國との塚、比婆之山に葬と奉ると云ふ、故其所謂豫母都比良坂は今出雲國の伊賦夜坂となん云ふ、亦其豫美坂に所塞三石ハ道反大神とも申也、亦塞坐黃泉戸大神とも號と

伊邪那岐大神既還坐て、悔給けらく、吾は伊邪那志許米魂めき汚穢國に至て在けり、故吾は大御身の禊爲なと留て、粟門及速吸名門と往見給ふ、然に此二門は潮太急し、故、一書古事記、日向之橋小門之阿波岐原に幸坐て禊祓給き、參取日本書紀、故其、一書古事記、御帶、御裳、御衣、禊冠、左右の手纏を各成坐る神名、道之長乳齒神○按本書此神は前、衝立船戸に次に時置師神、次に和豆良比能宇斯神、次に道俟神也、未だ明徴を得ざ、姑く附て考を俟つ、一書古事記、之宇斯神○按日本書紀一書、長道磐神、煩神、開神、道敷神、五神と、次に奥疎神、次に奥津那藝佐昆古神、次に奥津甲斐辨羅神、次に邊疎神、次に邊津那藝佐昆古神、次に邊津甲斐辨羅神、古事記、舊於是上瀬ハ瀬速し、下瀬ハ瀬弱と、詔給ひて、中瀬に墮落て、滌給ふ時に、成坐る神名、八十福津日神、次、大福津日神、一書○按日本書紀、此神なし、又一書に備ふ、此二神、其穢繁國に至坐し時の汚垢に因て成坐る神也、次に其禊を直と云とて成坐る神名、神直昆神、次に大直日神、次に伊豆能賣神、次に水底に

滌給ふ時に所成神名、底津綿津見神、次に底筒之男命○按日本書紀一書、底

中に滌給ふ時に所成神名、中津綿津見神、次に中筒之男命○按日本書紀一書

也、同神水上、滌給ふ時に所成神名、上津綿津見神、次に上筒之男命○按日本書

土命、蓋同神也、又按本條八十禍津日神以下諸神、又上に記せる泉津事解

之男、又延喜式大祓祝祠に、速秋都比咩、氣吹戸主神、速須佐長比咩、神あふを因

生竟て後生坐る十神、合考ふる疑がば、事あり、彼大事忍男、事解之

男、あたりに石土毘古、石巢比賣、上筒之男命、大戸日別、大直日神、天之

吹男、氣吹戸主に、大屋毘古、大綾津日神、又大福津日神、大綿津見、三柱

の綿津見神に、速秋津日子比賣、伊豆能賣神、あたれり、如是れば、彼十柱神

は、もと此御祓の時に成坐る神等の一傳なり、とが、亂て重複りし物と見ゆ、故

書紀には、右に神名の多く見えざる、除れつるにやあらむ、然れども、今輒く

改むべきにあらねば、此三柱綿津見神、阿曇連等が祖神と、以齋く筑紫、斯香

姑附て後考に備ふ、神也、筑紫以下、據其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、三柱神、墨江之三前

大神也、書古事紀一、凡神祭之火を忌み、又祓禊をも専は、みな此より起れり、書紀

延喜式、日初、天照大御神、月讀命、各々各々、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱神、乃御

本紀、纂疏、依の隨、知看、が中、速須佐之男命、依し給へ、是國を知らせ、て八拳、拳心前に

至るまで、泣哭て、青山を枯山、泣枯し、海河は、悉泣乾き、又勇悍安忍坐て、人

草多に、天折えき、古事紀、日、是以惡神の音なひ、狹蠅なぞ、皆漏萬物の妖悉に發

りき、古事紀、故伊邪那岐大神、速須佐之男命に、詔く、何とかを、汝は事依せる國を

治とせ、て、哭泣ると、詔へば、答曰、僕、此國根之堅洲國に、罷らむと思ふが故に、

泣と申給ひき、爾伊邪那岐大神、大く御忿怒坐て、汝甚無道、天下の君と坐べか

らば、汝此國を治ば、殘傷こと多ならむ、此國に、莫住せと、詔ひて、即神逐に、夜

御宇氣比

善心ならじと詔ひて、即御髪を解て、御髻と纏て、御裳を纏て、袴と爲し、左右の御髻にも御裳にも、左右の御手にも、みな八尺勾璫の五百津の美須麻流の珠を纏持て、曾毘良に、千入の鞆を負ひ、五百入の鞆を附け、臂には稜威の高鞆を取佩して、弓腹振立て、劔の手上取握て、堅庭は向股に踏泥み、沫雪などを蹴散して、伊都の男健踏健ひ、稜威の噴讓を發して、待問給はく、何故上り來坐ると問給、爾速須佐之男命答曰、吾は邪心なし、唯大御神の命以て、吾哭伊佐知流事を問給ふ故に、白、つらく、吾は此國に往むと欲て、哭と白しかば、大御神然らば、汝は此國に勿往と詔て、遂給ふ故に、罷往とぞ、氣状を請とむと思て、こそ、雲霧を跋涉りて、參上りつれ、姦命の翻て、怒り坐むとは、思はざりけり、吾は異心なと、白と給へば、天照大御神、然らば、汝心は清明事は、何以知らまると詔ひき、於是速須佐之男命、各字氣比て、其誓を問、子生なと、白と給ひき、古事記、參取曰、故爾各天安河を中、置て、相對立、五字據日本、宇氣布

各字氣比て其誓を問、子生なと白と給

ひき、古事記、參取曰、故爾各天安河を中、置て、相對立、五字據日本、宇氣布

三 女神

五 男神

時、天照大御神詔曰、若汝異心有、は其所生兒必男子ならむと、言訖て、詔曰、日本書、先速須佐之男命の御佩せる十拳劔を乞度て、三段に打折、天の眞名井に振滌て、佐賀美に迦美て、吹棄、氣噴、狹霧に成坐る神名は、多紀理毘賣命、次市杵島比賣命、次多岐都比賣命、凡三柱女神生坐、於是速須佐之男命、天照大御神の左、御美豆良と纏せる八尺勾璫の五百津の御統の珠を乞度して、瓊響を珍々、然天の眞名井に振滌て、齧然咀嚼て、吹棄、氣噴の狹霧に、男御子化生、於是速須佐之男命與言、正哉、吾勝と詔ひき、故其御名を正哉、吾勝、勝速日、天之忍穗耳命と申、男御子以下、參取日本書、紀及一書、○按一書、古語奉りて、端八坂瓊之曲玉を獻、素蓋鳴尊、其瓊玉を持て、天照大神に奉り、誓約の間に、其瓊玉に感て、吾勝尊を生坐とあるは、蓋一説也、姑附て考、備ふ、次右の御髻と纏せる珠を乞度て、齧然咀嚼て、吹棄、氣噴の狹霧に成坐る神名は、天之穗日命、次に御に所纏珠を乞度して、佐賀美、迦美、而吹棄、氣吹の狹霧に成坐る神名は、天津日子根命、次に左御手と所纏珠を乞度して

歸然咀嚼之吹棄氣吹の狹霧に成坐る神の名活津日子根命次右御手に
所纏珠を名度とて歸然齟之吹棄氣吹の狹霧に成坐る神名熊野久須毘命

亦名熊野忍蹈命亦名熊野忍隅命凡五柱男神生坐古事記亦名以下日本書紀於是天照

大御神方速須佐之男命の固より悪き意なき事を知看日本書紀一書故詔曰是後

に所生五柱男子は物實我物に因て成坐り故自ら吾子也先に生坐る三柱女

子は物實汝物に因て成坐り故乃汝子也如此詔別給ひ古事記其三柱女神と

須佐之男命と授て筑紫洲に天降り坐とめ汝三柱神は道中降居て天孫と

助奉りて天孫命の爲に所祭よと教給ひ宇佐島に天降り坐し今海北道中

中在て號と道主貴と申と此此三柱神は筑紫胸形君等が以齋く胸形三前

大神也日本書紀及一書其後に生坐る五柱の男子の中より正哉吾勝々速日天

之忍穗耳命亦名天大耳命亦名天忍穗根命日本書紀一書又稱て天祖吾勝尊と申

り古語拾遺此神高御產巢日神の御女萬幡豐秋津師比賣命に娶て生坐る御

子天照國照彥火明命亦名天火明命此神天道日女命に娶て生坐る兒天香山

命亦名天香語山命此は尾張國造尾張連等が祖也古事記日本書紀一書舊事本紀次天穗日

命の子建比良鳥命此は出雲國造无邪志國造上菟土國造伊自牟國造津島縣

直遠江國造等之祖也次に天津日子根命は凡川内國造額田部湯坐連茨木國

造倭田中直山代國造馬來田國造道尻岐閉國造周芳國造倭掩知道高市縣主

蒲生稻寸三枝部造等之祖也古事記是より前天照大御神月讀神と詔給はく

原中國之保食神と云神有りて聞り汝往て候べしと詔ひき故月讀神勅の隨

に天降り坐て保食神の許に到り給ふ故保食神其口より飯及鱈廣物鱈狹物

毛鹿物毛桑物と取出て其種々の味物と百取の机に作具て進取出以下參取古事記

時に月讀神念り作色と詔曰穢しき哉鄙と云哉何を口より吐れる物を以て

吾も養とて詔ひて迺劍を拔て其神と擊殺とて復命て具に其事を言と時と

天照大御神甚く御怒坐て、汝は惡神也、相見まゝ欲せざと詔て、各隔離て住坐
○按古事記、月讀神を 是後天照大御神復天照大人大人據舊を遣して、看
事本紀を遣して、看
まめ給ふ時、保食神實よ己に死たりき、故其殺さ之給へ、神は身體、粟種
稻種、麥、大豆、小豆、及、蠶と牛馬と生き、故天照大人皆取持來て奉進ふ時、天照
大御神喜して詔曰、是物は顯見着生の食て活べき物ぞと詔て、乃粟種、麥豆を
陸田種子と、稻と水田種子とし、又天邑君と定め、即其稻種と始て、天狹田長
田に殖まめ給へば、其秋、垂穗八握よ莫々然て甚快矣日本書紀一書○按古事
記、神產巢日御祖命之
取らしめ、種と成り、此保食神也、即太宜津比賣神也參酌日本書紀 凡桑葉を以
て蠶を養ひ、其蠶と口裏よ合て絲を抽き、又、織織の業、蓋此時より始まりき、
日本書紀一書、爾速須佐之男命、天照大御神、白曰く、我心清明、故我生りし
書、神名秘書、爾速須佐之男命、天照大御神、白曰く、我心清明、故我生りし
御子男子を得たり、此に因て白さば、自ら我勝ぬと云て、勝佐備に奉は、大御神
の御營田に畔放、備理、備理、重播、秋は穀物己に成る時、絡繩を曳し、馬伏

須佐之男命
勝佐備

天石屋戸

申刺き、古事記、男子據日本書紀、春、亦天照大御神の新嘗、聞看時に、其新嘗の
御席、下陰に尿まり散しき、○按古事記、新嘗新宮、大御神知しめと受て
徑よ其御席の上よ坐き、是よ由て御體不平給ふ、日本書紀 故然爲れども、天照
大御神は、恩親に御意以て、溝給は受恨給は受容て詔曰、如尿は、醉て吐散す
こそ、我那勢命如此爲つらめ、又田に畔離、溝理ふは、地と惜じこそ、我那勢命如
此爲つらめ、と詔直し給へども、猶其惡態止ざて、轉あり、日本書紀、天照大御
神齊服屋に御坐て、神衣織まめ給ふ時、其服屋に棟と穿ち、天斑駒と逆
刺に刺して墮し入ふ、時、天衣織女見驚きて、梭よ身を衝傷ひて死にき、古語
拾遺天斑駒と、故爾天照大御神發愠坐、天石屋に入坐、石戸を開て刺隠
り坐き、古事記、發愠據日本書紀、○按日本書紀云、素蓋鳴尊、天照大神、神衣
を織給ふと齊服殿に坐を見て、天斑駒と刺き、殿裏を穿て投納る時
に天照大神驚動給ひ、梭を以て御身を傷給ひき、又一説云、稚日女尊、齊服殿
に坐て、神の御衣を織給ふ時に、素蓋鳴尊之を見て、斑駒と逆刺し、殿内に
投納給ひき、爾稚日女尊驚て、梭より墮、持たは梭に體を傷て、神退坐き、故天
照大神素蓋鳴尊に詔給はく、汝猶黒心あり、相見まゝ欲せ受と詔て、乃天石窟

に入坐て磐戸爾高天原皆暗く葦原中國悉闇し此に因て常夜往○按日本書紀六合之内常闇にして於是萬神の音響ハ狹蠅など皆漏萬妖悉と發りき是以八百萬神悉迷て天安の河原に神集々て禱奉るべき方を計る愁迷據古時之高御産巢日神の子思金神に思はさめ給ひき此神思慮の智あり故深謀り遠慮て白給ひく彼神の象を圖造りて招禱奉らむと白給ひき日本書紀故是思金神の兒天表春命ハ信濃阿智祝部の祖也次子天下春命は秩父國造の祖也舊事本紀於是思金神の議ハ隨に天安河の河上の天堅石を取り天金山の鐵を取て鍛人天津麻羅を求て伊斯許理度賣命に科せて日像の鏡を造らしめき古語拾遺古事記○按日本書紀一書云鏡作部遠祖天糠戸神初度造れり一面は少さる諸神の意に合は受此は紀伊國坐日前國懸大神也古語拾遺釋日本紀小次度造れりハ八咫鏡又云其狀明麗うりき是右記諸神據鎮座傳記

ハ伊勢に崇祭る大御神坐と古語拾遺參取日本書紀故其伊斯許理度賣命は鏡作部

祖也日本書紀一書爾玉祖命と科て八尺勾瓊の五百津の御統の珠を造らさめ古事山電神と科て五百箇真坂樹八十玉鏡と探さめ野船神に科て五百箇野篁八十玉鏡と探さめき日本書紀故是玉祖命亦名權明玉命又天明玉命○按日本書紀祖豐玉神玉を造るは高御産巢日神の孫玉祖連忌玉作出雲國玉作等祖也日本書紀一書玉作遠祖伊非諾尊兒天明玉神と作也爾に高御産巢日神の子天太玉命に諸部の神と率て和幣を造らさめ故長白羽神と科せて麻を殖て青和幣と作らさめ天日鷲神津昨見神に科て穀木を殖る白和幣を作らしめ天羽雄雄神と文布と織さめ天棚機姫神に神衣を織さめ手置帆負神彦狹知神と科て天御量以て大峽小峽の材を伐りて瑞殿を造り又御笠矛盾を造らさめ天目一箇神に科て難刀斧及鐵鐸を作らさめ給ひき古語故是長白羽神は伊勢國麻績氏祖也古語拾遺次子天日鷲神ハ粟國忌部の祖にさ其國に坐忌部神也日本書紀古語拾遺次子天羽雄雄神は倭文氏の祖として大和國葛木

倭文坐天羽雷命神常陸國靜織里坐靜神也古語拾遺延喜式參取常陸風土記日本書紀纂疏次に手置

帆負神は讚岐國忌部の祖彦狹知神ハ紀伊國忌部の祖也日本書紀一次に天

目一箇神は天津日子根命の兒筑紫伊勢兩國忌部の祖也新撰姓氏錄凡々此古語拾遺

種々の物既ニ備りて皆來集ヘル時に天兒屋命天太玉命を召て天香山の真

男鹿の肩骨を全抜に抜て天波々迦を取て占擬ニめて天香山ハ五百箇真坂

樹を根掘に許士て上枝ニ其天明玉命の作れル八尺勾瓏五百津御統の玉を

取着け中枝に其伊斯許理度賣命の作れル八咫鏡を取繫け下枝ニ天日鷲命

ハ所作木綿を取垂て此種々の物の太玉命布刀御幣と取持ニて天兒屋命太

詔詞禱白して○按古語拾遺に太玉命として捧持稱讚と云め又天兒屋命も

執持て仕奉ルは忌部氏の職な事神世より以來定まれ例として日本書紀

古事記神祇令祝詞など詳なれば此説恐らくハ謬れり故今探ら受姑附て

考に神祝祝古事記日本爾常世長鳴鳥を集めて互に長鳴せしめ天手力男

備ハ神祝祝古事記一書爾常世長鳴鳥を集めて互に長鳴せしめ天手力男

神御戸殿ニ隱立ニて天宇受賣命天の香山ハ天之日蔭と手繼に繫け天の真

拆を髪とし天香山ハ小竹葉飲戀木葉を手草に結ひ手に著鐸の矛を持て天

之石屋戸前ニ庭燎を燒き誓槽伏々踏登梓呂許志神懸と胸乳をかき出裳

紐を陰に推垂き爾高天原動りて八百万神共に笑ひき日本書紀古事記古語拾遺於是天

照大御神怪しと思ほし天石屋戸を細めに開て内より詔給へるは吾隱坐

に因て天原自聞く葦原中國も皆聞げむと思ふを何以天宇受賣は樂し亦八

百萬神諸咲ふぞと詔給ひき爾天宇受賣汝命に益りて貴神座すが故に歡喜

咲樂と白き如此白と間に天兒屋命太玉命其鏡を指出て天照大御神ニ示

奉る時天照大御神愈奇と思ほして稍戸より出臨坐時にか隠り立

天手力男神其扉を引開其御手を取て引出奉りき古事記日本書紀即天兒屋

命天太玉命尻久米繩を其御後方に控度して此より内に莫還り入坐と白

き日本書紀古事記是時鏡を以て其石屋ニ入しりば戸ニ突觸て小し瑕つけ

り其瑕今猶存り日本書紀一書故天照大御神を新宮に遷ニ坐せ奉り大宮賣神を

今世内侍善言美詞を以て君と臣との間を和らぎ辰祿を悦ばせ奉るが如き是也。豊磐間戸命櫛

磐間戸命其殿門を守衛とめき此三神共天太玉命に子也。古語故天照

大御神天石屋戸を出坐る時に高天原も葦原中國も自ら照明りて衆俱に相

見ると面皆明白き故諸神大喜て手と伸く歌舞ひ相共に阿波禮阿那於茂

志呂阿那多能志阿那佐夜憇飲憇と稱給ひき。古事記古語拾遺諸神大喜據日本書紀一書凡て御世

御世も承繼坐て天神地祇を祭り給ふ禮典ハ蓋皆此より起れり。日本書紀令義

故其天兒屋命ハ興台産靈神玉主命の女許登能願運比賣命に娶り所生子に

して中臣連等の祖也。日本書紀一書古事記天太玉命は忌部首等が祖天宇受

賣命ハ後女君等が祖也。古事記於是八百萬神共に議り速須佐之男命に千座置

須佐男之命神逐

戸を科せ亦鬚髮及手足の爪を抜おめて乃天兒屋命其鮮除の太諄辭を

宣おめ速須佐之男命を噴て汝所行甚さがなし故天上に勿住と又葦原中國

にも莫住と底根國と速造と云て神逐やらひき。日本書紀及時霖降しうば

青草を結束て蓑笠と爲て衆神に宿乞給ふに皆汝ハ躬行悪く逐請し神也

如何我も宿乞と云く共に距申しき是以甚く雨降風吹ども得留休也辛苦つ

つ降坐き自爾以來蓑笠を着て他人の屋内に入事と諱み又束草を負り他

人家内に入事と諱て此を犯者は必受解除を償ふ此大古の遺法也是後速

須佐之男命詔給はく我諸神も所逐て今永く去らむとせよ如何我姊命と

見之奉ら受く楯に徑去らむやと詔て迺後天に上參給ふ時に天宇受賣命之

を見て大御神と白せば吾那勢命上來坐る故は復好意にあらじと詔給ひき

於是速須佐之男命天照大御神に白し給はく吾更之昇來三由は衆神我を根

國に逐ふ故今去りなむとせよと姊命も見奉らてハ離り奉る事あたハぬと

を實に清心を以て復上り來つれ今見之奉るも己訖ぬれば神等の意の隨永

く根國も歸なむ姊命平安坐て天國を照臨看せ且吾清心をて生る兒等は

姊命も奉るも白して復還り降坐き此時須佐之男命其子五十猛神を率て

新羅國曾尸茂梨地に降到居坐て乃興言し曰く此地は吾居まゝ欲せ受じ詔て壇以て造れ舟に乗て東に渡り出雲國簸川上なる鳥髮之峯に到坐き○按出雲風土記意宇郡安來郡此條云神須佐乃鳥命天の壁立廻り坐し時此よ來坐て詔はく吾御心は安平く成ぬと詔ひき故安來と云とあるは蓋此時の事也姑附爾須佐之男命詔曰韓卿の鳥は金銀あり吾兒の所馭國に浮寶不考と備ふ在ば不佳と詔て乃杉檜檜樟を生給ひ又其用ふべき法を定めて乃稱し曰く杉檜樟と此兩樹は浮寶と爲べし檜は瑞宮の材と爲べし檜ハ顯見青人草の奥津乘ノに將臥む具と爲べしと詔て其畷べき八十の木種も皆能播生し給ひき初其子五十猛神亦名大屋彦神亦名據舊天降坐る時樹種を多し持り下り坐き然れども韓地に殖受む持歸りて筑紫より始て大八洲の國內悉く播殖て山と成給ひき則紀伊國に所坐大神也此神の妹大屋彦姫命按舊事本紀大屋姫神と作次は爪津姫命も木種を分布給ひき故此神を紀伊國に渡奉りき日本書紀一書爾須佐之男命鳥髮の地に降り給ふ時しを箸其河より流れ下り

青草を結束て蓑笠と爲て衆神に宿乞給ふに皆汝ハ躬行惡く逐謫し神也如何我の宿乞と云々共に距申しき是以甚く雨降風吹ども得留休迄辛苦つ一降坐き自爾以來蓑笠を着て他人の屋内に入事を諱み又束草を負て他家内に入事事を諱て此を犯者は必受解除を償ふ此大古の遺法也是後速須佐之男命詔給はく我諸神の所逐て今永く去らむとせよ如何我妹命を見え奉ら受て檀に徑去らむと詔て迺後天に上參給ふ時に天宇受賣命之を見て大御神と白せば吾那勢命上來坐る故は復好意にあらじと詔給ひき於是速須佐之男命天照大御神に白し給はく吾更之昇來三由は衆神我を根國に逐ふ故今去りなむとせよと妹命を見奉らてハ離り奉事あたハぬこそ實に清心を以て復上り來つれ今見え奉るこ己訖ぬれば神等の意の隨永く根國に歸なむ妹命平安坐て天國を照臨看せ且吾清心をて生る兒等は姊命を奉ると白して復還り降坐き此時須佐之男命其子五十猛神を率て

○按出雲風土記意宇郡安來郷に條云神須佐乃鳥命天の壁立廻り坐し時此
來坐て詔はく吾御心は安平く成ぬ詔ひき故安來と云とあるは蓋此時
の事也姑附 爾須佐之男命詔曰韓郷の鳥は金銀あり吾兒の所馭國に浮寶不
考之備ふ 在は不佳と詔て乃杉檜枝樟を生え給ひ又其用ふべき法を定めて乃稱し曰
く杉と樟と此兩樹は浮寶と爲べし檜は瑞宮の材と爲べし枝は顯見青人草
の奥津乘尸に將臥む具と爲べしと詔て其嗽べき八十の木種を皆能播生し
給ひき初其子五十猛神亦名大屋彦神亦名據舊 天降坐る時之樹種を多し持
り下り坐き然れども韓地に殖受盡く持歸りて筑紫より始て大八洲の國內
悉く播殖て山と成給ひき周紀伊國に所坐大神也此神の妹大屋彦命
按

舊事本紀大屋 次は抓津姬命も木種を分布給ひき故此神を紀伊國に渡奉
りき 日本書 爾須佐之男命鳥髮の地と降り給ふ時しを箸其河より流れ下り

き故其河上と人在けりと思して覓上り往坐しは老夫と老女と二人在りて童
女を中と置て泣なり汝等ハ誰ぞと問給へば其老夫僕は國神大山津見神に
子也僕名ハ足名椎妻が名ハ手名椎女が名は櫛名田比賣と白も亦汝の哭由
ハ何如と問給へば我女本より八稚女ありき是と高志の八俣遠呂智なも年
毎と來て喫なると今其來ぬべき時なると故泣と白す其形狀は如何とかと
問給へば彼が目は赤加賀智なると身一つと頭八尾八あり亦其身は羅及檜
搵生ひ其長と谿八谷峽八峽に度りて其腹を見れば悉く常も血爛たりと申
す爾速須佐之男命其老夫は是汝の女ならば吾と奉らむやと詔給ふに恐け
れど御名を知ら受と白せば吾は天照大御神の伊呂勢也故今天より降坐つ
と答給ひき爾足名椎手名椎神然坐とば恐し奉らむと白き爾速須佐之男
命乃其童女を湯津爪櫛と取成て御美豆長に刺て其足名椎手名椎神と告給
はく汝等八鹽折れ酒を醸酒八甕を醸む又毒酒を醸む 且垣を作廻し其垣

八俣大蛇

神氏志料 卷一 十八

に八門を作り門毎に八假殿を結ひ其佐受岐毎に酒槽を置て槽毎に其八醞酒を盛て待てよ我汝の爲に其蛇を殺してよと告給ひき我字以下據日本書紀一書故告給へる隨に設備て待時に其八岐蛇信に言しが如來つ乃槽毎に各を各

を巳が頭を入て其酒を飲き於是飲醉て留て伏寝たり留字據應永本古事記雨速須佐之男命其御佩せる十拳劔を抜て其蛇を斬散給ひしかば肥河血に變て流れ

き故其中尾を斬給ふ時御刀に刃毀き怪しと思ほして御刀の鋒以て刺刺見えなはしきらば都牟刈之大刀あり故此大刀を取て異物ぞと思ほして天

照大御神に白上給ひき○按日本書紀一書曰素盞鳴尊詔給はく此劔は吾私とて用ふべき物なあらじと詔ひて五世孫天之

葺根神をして天叢雲劔是也蓋大蛇に居る所の上に常雲氣ありし故に名けたりき天叢雲劔以下據日本書紀一書故是以其速須佐之男命宮造るべき地を出雲國

と求給ひき雨須賀れ地と到坐て詔曰く吾此地に來坐て我御心清々三と詔て其處になも宮作りて坐々けら茲大神初須賀宮を作ら三と時に其地より

須賀宮

雲立騰りき雨御歌作し給ふ其御歌は夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻基微雨夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐表於是其足名推神を喚て汝は我宮の首た

と告給ひて稻田宮主須賀之八耳神と命せ給ひき此足名推神亦名稻田宮主神といふ亦字以下據日本書紀○按摩書と稻田宮主寶狹之八箇耳に作り又此神號を以て足摩故手一乳二神の號とて今姑く古事記に従

ふ故其櫛名田比賣亦云奇稻田姬是也と以て久美度と起て所生神名を八島士奴美神と云ふ又大山津見神の女名神大市比賣と娶て子大年神次と宇迦之御魂神

と生給ひき古事記都留支日子命國忍別命磐坂日子命衝杵等乎留比古命青幡佐草日子命を又皆此大神の御子神也爰に須佐之男大神須佐郷に至坐て

此國は小國なれども國處也故吾名は石木と着じと詔て即己命の御魂を鎮置て大須佐田小須佐田と定給ひ出雲風土記然後に熊成岸に居て遂に根國に入

坐き日本書紀一書是は出雲國熊野坐大神也出雲風土記延喜式故其大年神の子大國魂神次に韓神次に曾富理神次に白日神次に聖神亦子大香山戸臣神次に御年神亦

大國主神々系

子奥津日子神、次に奥津日賣神、亦名大戸比賣神、此は諸人の以拜く竈神也、次に大山咋神、此神は近淡海國の日枝山に坐す、亦葛野の松尾に坐用鳴鑄神也、次に庭津日神、次阿須波神、次波比岐神、此阿須波神、波比岐神は座摩御巫の持齋く神也、此字以下、次に香山戸臣神、次に羽山戸神、次に若山咋神、次に若年神、次に妹神、亦名土之御祖神、上件大年神の羽山戸神、子並十六神、若沙那賣神、次に彌豆麻岐神、次に夏高津日神、亦名夏之賣神、次に秋毘賣神、次に久久年神、次に久久紀若寶葛根神、上件羽山戸神、子並八神、故其大年神の兄八島土奴美神、亦名清之繫名坂輕彦八島手神、又清之湯山主三名狹漏彦八島野神、亦名據日本書、此神四世の孫天之冬衣神、○按日本書紀一書、素盞鳴尊五世孫天此紀一書、此神四世の孫天之冬衣神、之葺根神、蓋同神也、姑附て考に備ふ、此神の子大國主神、亦名大穴牟遲神、と申す、故此大國主神の庶兄弟八十神坐す、然しども皆國は大國主神に避奉りき、避奉りし所以は、其八十神各々各々稻羽の八上比賣と婚ばむと心有て、共に稻羽に往けり、時に大穴牟遲神に袋を

聘八上比賣

負せ、從者也、とて率往き、於是八上比賣八十神に答けらく、吾は汝等の言に聞じ、大穴牟遲神に嫁なむといふ、故爾八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむと相議りて、伯伎國の于間山本に至て云けるは、此山に赤猪在なり、故和禮共、追下りなば、汝待取れ、若待取らざらば、汝を殺さむと云て、猪に似たる大石を火以て焼て、轉落さき、爾追下り取時に、即其石は燒着きて、死給ひき、爾其御組命、哭患て、天よ參上りて、神産巢日之神に白と給ふ時、乃蚺貝比賣と蛤貝比賣とを遣て、作り活としめ給ふ、爾蚺貝比賣岐佐宜焦て、蛤貝比賣水を持て、母に乳汁を塗しかば、麗しき壯夫に成て、出遊行き、於是八十神見て、且欺る山に率入て、大樹を切伏せ、矢を茹て、其木に打立、其中に入らぬめ、即其氷目矢を打離ち、拷殺しき、爾亦其御祖命、哭つて求ば、見得て、即其木を拆て、取出活して、其子よ告曰く、汝此間に在らば、遂に八十神に所滅なむと詔る、乃木國の大屋毘古神の御所に速遣き、爾八十神覓追至りて、矢刺時に、木俟より漏逃る去給ひ

き、御祖命子に告云く、須佐能男命の坐まを根、堅洲國に參向てよ、必其大神議
 り給ひなむと告給ふ、故に詔命の隨に參出て其大神の女須勢理毘賣命を妻と
 して住坐き、初須佐之男命の御所に參到し時、須勢理毘賣出見て目合て、還
 入て其御父に甚麗き神來坐とつと白給ひき、故其大神出見て、此の葦原
 色許男と云ふ神と詔ひて、即喚入て其蛇室屋に寝まめ給ひき、於是其妻須
 勢理毘賣命蛇比禮を其夫に授て、告云、其蛇昨むとせば、此比禮を三擧て打撥
 給へと告給ふ、故教れ如給ひき、蛇自ら静りて故に平寢て出給ひき、亦
 來日夜は吳公と蜂との室屋に入給ひき、且吳公蜂の比禮を授て、先の如
 教給ひし故に、平て出給ひき、亦鳴鏑を大野の中に射入て、其矢を採まめ給ふ、
 故其野に入坐時、即火を以て其野を焼廻らとつ、於是出む所を知らざり間に
 其處を踏まかば、富良なる處ありて、落入隱り之間、火は焼過ぬ、於是其妻須
 勢理毘賣ハ、喪具を持て哭つつ來ま、其父の大神ハ、己に死ぬと思ほして、其

野に立せば、爾其矢を持て奉りき、爾其大神如此種々苦まめ給ひつれ
 ど、何も平安坐事と御心よ愛く思ほして、寢坐せる時に、其妻須勢理毘賣を率
 て其大神の生太刀生弓矢及天沼琴を取持して、沼琴應永逃出坐時に、其天沼
 琴樹に觸て地動鳴き、故其所寢大神聞驚して、黄泉比良坂まで追至坐て、遙に
 望て、大穴牟遲神を呼て曰く、其汝が持る生太刀生弓矢を以て汝が庶兄弟等
 とば坂の御尾に追伏せ、河の瀬毎に追撥て、意禮大國主神となり、又宇都志國
 玉神となりて、其我女須勢理毘賣を嫡妻とて、宇迦山の山本と底津石根
 に宮柱太知高天原と氷楯高知て居、是奴よと詔ひき、於是大國主神八十神を
 伐ちて、城名樋山地に城を作り給ひ、其八十神とば青垣山内に置たら
 じと詔、於是大國以下其大刀弓矢を持て追避る時、坂の御尾毎に追伏せ
 據出雲風土記
 河の瀬毎に追撥て、國作り始給ひき、故其八上比賣ハ、先期の如く美刀阿多波
 志つ、故其八上比賣は率て來坐つとも、其嫡妻須勢理毘賣を畏み、其生坐

る子ば木俟に刺挾て還り坐き故其子れ名と木俟神と申と亦名は御井神と申す此は座摩の御巫の伊都伎奉る神也座摩以下據延喜式於是大國主神廣矛を御杖と爲て國中に邪鬼と撥平給へんを以て亦名を八千矛神と申す參取日本書進此八千矛神高志國に沼河比賣に娶坐て子健御名方神を生坐き下據舊事本又其神の嫡后須勢理毘賣命甚く嫉妬し給ひき故其比古遲神和備て出紀雲より倭國に上り坐むとして束装立す時片御手は御馬の鞍に繫げ片御足其御鏡に踏入る歌ひ給ふ爾其后大御酒杯を取らんとて立依指擧る歌坐る即字伎由比して宇那賀氣理て今に至るまで鎮坐き其夫神の歌に曰鳥玉の取束装澳津鳥むなみる時緒たぎを尾はふさはづ邊津浪磯に脱棄鳩鳥の青き御衣を眞具に取装ひ澳津鳥曾みる時波多々藝母とを不宜邊津浪磯に脱うる山縣に麻岐斯阿多泥都岐染木が汁に染衣を眞具に取装ひ澳津鳥曾看る時はたたぎを此に宜し伊刀古夜の妹乃命群鳥我群往ば引鳥我引往ば泣じといは汝の言とを山處の一本薄うなりぶと汝が泣さまく朝雨れと霧と立ぶと若草の妻れ命ことの語りごとを婆其后神の歌に曰八千矛の

大國主神之裔

神の命や我大國主とてハ男にハ坐ば打見る鳥れ崎々かき見る磯の崎れら若草の妻持せらぬ吾ばきよ女にしあれば汝を置て夫はなと汝を置て夫は無と文垣のふはやが下と蒸被柔が下と袴袋とやくが下と沫雪の若やる脚とを叩きたたきまなかり眞玉手玉手とを纏服長に寐をと宿せ豊御酒たて奉らせ故此大國主神胸形奥津宮に坐神多紀理毘賣命と娶て生坐る子阿遲鉏高日子根神次に妹高比賣命亦名下光比賣命古事記故其阿遲鉏高日子根命御齋八握生まで御辭通ハさど晝夜甚哭坐き其時御祖命御子を船に乗て八十島を率巡りつゝ宇良加志給へとも尙やまだ哭坐き爰に大神夢願し給はく御子に哭由を夢に告給へと願坐けるに夜御子の辭通はさど夢に見給ひき寤て問給ふ時に御津と白さき何處を然云と問給へば即御祖命に御前を立去り出坐て石川度り坂上よ至留りて此處と白さ給ひき爾時其津の水を汲出て御身沐浴坐き故其處を三津と云故此水は國造神吉事奏とに朝廷に參向ふ時に汲出る用初る水也故是阿遲鉏高日子根命の子名多伎都比古命亦

子鹽治毘古命也申す出雲風大國主神亦神屋楯比賣命に娶て生坐る子事代

主神亦八鳥牟遲能神の女鳥耳神に娶て生坐る子鳥鳴海神古事記亦子山代日

子命亦子和加布都怒志命此神は天御領田の長仕奉坐き出雲風亦子伊勢都

比古命伊勢都比賣命亦子石龍比古命妹石龍比賣命亦子建石敷命亦子玉足

比古命王足比賣命播摩風此大國主神の子凡一百八十一神坐き日本書故其

鳥鳴海神日名照額田毘道男伊許知邇神に娶て生坐る子國忍富神此神葦那

陀迦神亦名八河江比賣に娶て生坐る子速甕之多氣佐波遲奴美神此神天之

甕主神の女前玉比賣に娶て生坐る子甕主日子神此神於迦美神の女比那良

志毘賣に娶て生坐る子多比理岐志麻流美神此神比々良木之其花麻豆美神

の女活玉前玉比賣神に娶て生坐る子美呂浪神此神敷山主神の女青沼馬押

比賣に娶て生坐る子布忍富鳥鳴海神此神若畫女神に娶て生坐る子天日腹

大科度美神此神天狹霧神の女遠津待根神に娶て生坐る子遠津山岬多良斯

神凡八島土奴美神より以下之を十七世神と云ふ古事記○按本書に十五神あり乎或は其二世の神名を初大國主神平國の時に出雲國伊佐佐の小汀に到

脱せり歟姑附考と備ふ坐て御食せし時海上より人聲あれば驚きて求給ふに更なる物も見之頃時ありて一人の小男波穗より天之羅摩船に乗て鷺鶴羽を衣服にして湖水の隨

歸來りつ故其名を問はれども答へず且所從は神等に問はれども皆知らざ

ると白き故久延毘古を召て問はし此は神産巢日神の御子少名毘古那神

なりと白しき故爾に使を遣して神産巢日御祖命に白上しかば詔曰此は實

に我子也吾生る子千五百座あり其中に最悪くて教養に順はざ吾手俟より

漏墮三子也愛み養ふ汝葦原色許男命兄弟と爲る其國を作り堅めてよ

と詔ひき故其より大穴牟遲と少名毘古那と二柱神相並ばして心を一ひ力

を裁せ葦原を殖生しつゝ此國を作堅給ひ參取日本書紀古事記葦原復顯見蒼

生及畜産の爲に其病を療す方を定め又鳥獸昆虫災異を攘はむと爲て

大穴牟遲
少名毘古
那經營國
土

は禁厭の法を定給ひき、是以百姓今に至るまで成く、其恩頼を蒙て、皆効驗あり、日本書紀一復比少名毘古那神ハ酒を造り、神也、故亦區之神と申也、日本書紀

釋曰、大穴牟遲神亦酒を醸り坐き、日本書紀播磨大國主神、少名毘古那神に謂り給ひ、吾等が造りし國何善成りと謂らむやと詔へば、少名毘古那神或

は成せる處あり、或は成さざる處も有と詔ひき、其後少名毘古那神は、常世國と渡坐き、於是其國中の成終ざる所をば大國主神獨ちて能國巡り作り給ひ、

出雲國に至坐て、乃興言と詔曰、此葦原中國は、本より荒茫て、磐根草木まで

威強暴ありと、吾既と摧伏て皆和順へり、此に因言ば、今此國を理ふは

唯吾一人而已也、何れの神と共々吾此國を相作らましと詔ふ、時に海原を照

して依來る神あり、其神の詔曰、如吾あら受ば、汝何能此國を平めや、吾在に依

とそ、此大造續を建つれ、能我御前を治めてば、吾共々に相作り成るも、若然らば

ハ國成難ましと詔ひき、爾大國主神問給ひ、然らば汝ハ誰ぞと答曰く、吾ハ

汝の幸魂奇魂也、大國主神白し給ひ、然り、廻知ふ汝は吾幸魂奇魂也、けり、今

何處に住むと思ふぞと白し給へば、吾を以倭の青垣山山上に齋奉れと答言

き、故彼處に御室を營り、鎮坐せしめ給ひき、故御室山と云ふ、此ハ大國主神

ハ和魂に坐三輪の大物主神也、又狹井社に坐ば、此神の荒魂神也、參取日本書

記、御室以下據大三輪鎮座、天神の命もて、此漂へる國を修理固成せと詔へ

大命を、速須佐之男大神より大國主神に傳へて、天下を經綸せしめ給ひき、故大

國主神、即其大功績を成訖座を以て所造天下大神と稱奉りき、日本書紀古

土記、於是天照大御神の詔命以て、豐葦原の子五百秋、長五百秋、水穗國ハ、我御

子正勝吾勝々速日天忍穗耳命の所知國と言依と給ひて、天降と給ひき、古事

記、雨天忍穗耳命、天浮橋を立きて、臨眺て詔曰く、彼地は甚く騷擾て在けり、不須

頗傾凶めき國也と告給ひて、更に還上らきて、天降り坐さる狀を、天照大御神

に請給ひき、爾高御產巢日神、天照大御神の命以て、天安河の河原に、八百萬

平國之議

神を神集集へて思命神と思はしめて詔曰此葦原中國は我御子の所治國と
 有し給へる國也故此國は道速振荒振國神靈なる光耀神邪神多に在て磐
 根木株草の片葉も能言語が如夜ハ火瓮の若之と喧響畫ハ狹蠅なきて之を沸
 騰何神を使してり平げまきて詔ひき爾思命神及八百萬神等成議り白さく
 天菩比神は傑たる神也是遣まてまきて言き故天菩比神を遣しつれば乃大國
 主神に媚附て三年よ至きて復奏とぞりき日本書紀及一書古事記故仍其子大背飯三熊
 之大人を遣まつるに此神も其父も順ひて報命とぞりき日本書紀是以高御產巢日
 神天照大御神亦諸神等に問給はく葦原中國を遣せる天菩比神久とく復奏
 と受亦何神を使まてば吉げも爾思命神諸神等食白さく天津國玉神の子天
 若日子は壯士なり遣してまて申さき故爾天鹿兒弓天羽羽矢を天若日子に
 賜て遣しき於是天若日子も忠誠ならん彼國に降り到り即大國主神の女下
 照比賣を妻ととも亦其國を獲と思て八年に至きて復奏とぞりて高津鳥の災よ

依り立處に身亡き日本書紀古爰に高御產巢日神○按古事記天照更に諸神
 事記延喜式

等と會て葦原中國に遣まべき神を選給ふ時よ思命神及諸神皆白さく思命
 神以下據古

磐裂根裂神の子磐筒之男磐筒之女神の子經津主神是佳けむと申さ
 事記

き時よ天安河之河上の天石窟に住神伊都之尾羽張神の子甕速日神の子爨
 速日神の子建御雷之男神進みて經津主神のみ獨丈夫にして吾は丈夫とあ

ら受やはと白し給ふ其辭氣慷慨りき故其二柱神を以て葦原中國を平け

に遣えき日本書紀故是經津主神は矢作連が祖也次よ建御雷之男神は倭川原忌

寸が遠祖也新撰姓於是其天菩比神は天の八重雲を押別り天翔國翔り天下

を見廻りて返言申給はく豐葦原の端穗國は晝ハ五月蠅なと水沸夜ハ火瓮

なと光神あり石根木立青水沫を事問て荒振國なり然れとも鎮平て皇御孫

命と安國と平げり所知坐とめと申て己命の兒天夷鳥命○按古事記天鳥

命を經津主神健御雷之男神と副て天降し遣まら荒振神等を獲平國作之大神

大國主
神避國

とを媚鎮て大八島國現事顯事々避とめき、延喜式健御雷之男神、據古事記、於是經津主神健

御雷之男神出雲國五十田狹の小汀に降到て、十掬劔を浪穂に逆に刺立て、其

鋒端に踏坐て、其大國主神と問曰、天照大御神高木神の命以て、間に使せり、汝

が所領葦原中國ハ、我御子の知とむ國と言依し給へり、故先我二神を遣とく

驅除平定とむ奈何避奉らむや否と問給ふ時に、答まつらく、僕ハ得白とじ、我

子八重事代主神、是白すべきを鳥の遊漁とに三穂の崎と往て未だ還來とじ

白して、即熊野諸手船に使者稻背脛を載遣とて、高御産巢日神の勅を事代主

神に令て、報命白とむ辭を問とめ給ひき、八重事代主神其父の大神に、恐と此

國ハ天神の御子に奉り給へ、吾も違ひ奉らじと云て、即其船を蹈傾て、天逆手

を青柴垣に打成て、隠り坐き、古事記、參取、此は高市御縣の鴨社及葛城ハ鴨社

に坐神也、延喜、此神八尋熊罴に化て、三島溝織姫に娶て、姫蹈鞞五十鈴姫命を

生坐き、日本書紀、故此八重事代主神ハ、長柄首長公長阿比古土佐國造等が祖也

新撰姓氏錄、舊事、故爾稻背脛報命白す時、大國主神其子の辭と二柱神に白

給ひき、日本書紀、故爾建御雷之男神亦白とべき子ありやと問給へば、大國主神白

給はく、亦我子建御名方神あり、此を除ては無しと白と給ふ、問とむ其建御名

方神、千引石を子末に撃て來給ひと、建御雷之男神の神異なる威稜と懼と

て、退居り、逃去き、故追往て科野國洲羽海と追至りて、殺とむと給ふ時に、建

御名方神白しつらく、恐と我父大國主神の命と違はじ、八重事代主神の言と

違はじ、此葦原中國ハ、天神の命の隨獻らむと申と給ひき、故更に且還來て、其

大國主神に問曰く、汝子等二神ハ、天神の御子の命ハ、隨違はじと白しつ、故汝

心奈何と問給ひき、爾答まつらく、僕子等二神の白せる隨、僕を違はじ、此葦原

中國ハ、命の隨既と獻らむと言し給ひき、古事記、於是經津主神還昇りて、報告給

ふ時に、高御産巢日神二柱神を還と遣て、大國主神と勅曰く、夫汝が治せと現

事は吾皇御孫命に治とめ、汝ハ、神事を治せ、又汝が住べき天日隅宮ハ、今造ら

せむ心又汝が祭祀を主らむ者は天菩比神也と詔しめ給ふ時大國主神報
 曰とく天神に勅教如此しを慙懃なるを何命と背き奉らむ如吾防禦ましか
 ば國內の諸神必共ニ防きなむを今吾避奉らば誰か不順者あらむ亦僕子
 等百八十神ハ八重事代主神神の御尾前と云々仕奉らば違ふ神ハあらじと
 白と給ひ一書古事記及又其國平給ひし時杖給へる廣才と二柱神と授けて曰
 く吾此才を以て卒に功を成せり皇孫命若此才を用ゑ國を治めば必平安坐
 なむ吾所知顯露事ハ皇孫命治むべと吾は退りて幽事を治むと白し乃岐
 神と二柱神に薦て此神吾に代て奉從べしと言訖即皇御孫命の鎮り坐む
 大倭國と白して己命の和魂を八咫鏡に取託て倭大物主櫛瓊玉命と名を稱
 て大三輪神奈備と坐せ己命に子味鋌高日子根命の御魂を葛木の鴨の神
 那備と坐せ事代主命の御魂を宇那提神奈備後三字據前に坐せ賀夜奈流美
 命の御魂を飛鳥の神奈備に坐せて天神の御子に近守神と貢り置て即躬ら

經津主神
 建御雷神
 平定中國

瑞之八坂瓊と披て遂に八百丹杵築宮と長へと隠り鎮坐ましき參取日本書紀及一書延
 喜此宮造らと一時諸神等宮處と參集て杵築給ひ而る後水戸神の孫櫛
 八玉神と膳夫ととて天御饗献りき出雲風土記古事記
 と詔曰汝天菩比命ハ天皇命の手長大御世を堅石に常石と齋ひ奉れと仰
 賜ひき此は出雲國造が世々杵築宮に仕奉りて神禮自利臣の禮自と天皇
 朝廷に御禱の神寶を献りて神賀吉詞を奏と縁也延喜式此字以下參酌續日
 意故經津主神健御雷之男神岐神と郷導ととて周流つゝ削平て逆命者は斬
 戮り歸順者は褒美給ひ荒振神等とハ神穰々ハ神和々々語問し磐根樹立
 草の片葉とを語止しめて荒振以下其中に服ハざり星神香々背男亦名天
 ハ倭文神建葉槌命と退しとらば乃服及一書日本書紀此經津主神國巡り坐時
 出雲の山國の地に來て是土ハ不止見欲と詔給ひ又楯縫郷にして天石楯
 縫直と坐き出雲風故其昔都大神葦原中津國を巡行山河に荒梗類を和平畢

て天上に歸らむと思欲す、即隨身嚴伏、甲、戈、楯、劍、及所執玉珪、悉く常陸國信太郷に留置て、即白雲に乗して、天上に還り坐す。常陸風爾二柱神、共に天上に還り参上り。葦原中國ハ皆曰く言向竟ぬと奏給ひき。参取日本書紀故此經

津主神と齋主神と云ふ下總國香取神宮に坐す。日本書紀一亦健御雷之男神

を香島天大神と申す。此ハ常陸國鹿島神宮に坐す。常陸風土此二柱神の御子

神陸奥國之鎮り坐は其稜威の遠く被及給へるを以て也。樹酌三代實錄故此

時歸順り。首渠者大物主神及事代主神乃八十萬神を天高市に合す。其神等

を帥て天に昇て其誠款を陳時に高御産巢日神其御女三穗津姫を大物主神

に配す。妻と給ひ八十萬神を率す。永に皇孫の爲に奉護と詔て即還降らし

め給ひ。即手置帆負神を作笠者と定め。彦狹知神を作盾者と定め。天目一箇神

と作金者と定め。天日鷲神を作木綿者と定め。櫛明玉神を作玉者と定め。即太

皇孫降臨

より始りき。且天兒屋命は神事の宗源と主神也。故太占の卜事を以て仕奉ら

しめき。日本書紀一書爾天照大御神高木神の命以て太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳

命に詔曰。今葦原中國平竟ぬと白す。故言依し賜へりし隨降坐す。知看と詔ひ

き。古事爾其太子忍穗耳命の答曰く。僕は降りなむ裝束せし間も子生まさつ

名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命亦名天津彦々火瓊々杵

尊又天津彦火瓊々杵根命亦天津彦國光彦火瓊々杵命亦天津彦根火瓊々杵

命亦名天之杵火火置瀬命亦天杵瀬命此御子を降せしと白す給ひき。此御

子高木神の女萬幡豐秋津師比賣命と娶坐て生坐る御子也。参取古事記日天

照大御神高皇産靈神特に憐愛と思ほし。崇養給ひき。日本書紀故是以忍穗

耳命の白と給ふまに。日子番能邇々藝命と詔科て天津高御座に座奉り

天津以下此豐葦原水穗國ハ汝知とむ國也と言依し給ふ。故隨命天降り坐べ

五部神

三種神器

忍日命天津久米命及諸伴部の神天物部を支加て天降り坐さめ給ひき諸伴
下據日本書紀一書舊事本紀倭姬世記○按舊事本紀天物部を於是其遠岐斯
以て鏡速日命に御伴神とせらる者蓋謬れり説は兵志の詳也
八坂瓊の曲玉八咫鏡及草薙劍三種寶物を以て永々天聖としめ永字以
義鮮延喜式亦常世思金神手力男神天石門別神古事記日本護齋鏡二面子鈴
古語拾遺 一合と副賜ひきと上ら延喜式皇孫命と天津高御座に坐て天津聖の鏡劍を
捧持給ひて永く天聖となさむ古語拾遺即八咫鏡草薙劍二種神寶を皇孫に
授給ひて永く天聖となさむ所謂神爾之劍鏡是也才玉自ら從ふとあるを
以て鏡劍二種をのみ神爾とせらるが如く聞ゆと書紀一書古事記並に於是
三種を舉る時は其説正確著明くして動かすべからず受故今之に従ふ
天照大御神御手と鏡劍を捧持給て言壽宣給はとく大八島豐葦原に水穗國
は吾子孫に統々王と坐べき地也皇我珍の御子皇御孫命就坐之此の天津高
御座に御坐て安國と平げく天津御膳に遠御膳と萬千秋の五百秋に安らげ
く瑞穂を齋庭に知食せ此に鏡は專吾御魂として吾御前と拜くが如同殿同
床に坐しめて齋鏡と齋き奉り給へ寶祚の隆坐む事天壤に共無窮なるべし

祭政一致

次之思金神は前事を取持て政爲給へと詔ひき此二柱神は佐久久斯呂伊須
受能宮に齋奉る參取日本書紀一
書古事記延喜式

次に登由宇氣神此ハ外宮に度相に座神也次々天石戸別神ハ御門の神也次
々天手力男神は佐那縣に坐り古事記次々護齋鏡一面ハ國懸神に坐す次に其
一面及子鈴は卷向穴師社に坐神也釋日本紀引復天兒屋命天太玉命に勅曰
惟爾二柱神を同殿内に侍ひて防護り又吾高天原を所御齋庭の穂を吾
に御奉るへしと詔ひき爾に高御產巢日神勅曰吾は天津神籬及天津磐境を
起樹て皇孫に爲に齋奉らむ汝天兒屋命太玉命天津神籬を持って葦原中國に
降る亦皇御孫命の爲に齋奉れと詔ひて復太玉命と諸部神を率て其職に供
奉る事天上の儀の如くせよと詔ひて諸神を共に陪從しめ給ひき日本書
紀一書
復太玉命以蓋皇祖天神を敬祭るハ大祭の本と云々其御祭は又天下を治る
下古語拾遺

後田毘古神

の本なる事茲に明らる也 斟酌日本書紀 記令 爾日子番能邇々藝命天降坐むじむる時に先驅り神還て白さく天八衢の鼻長七咫背の長さ七尺餘の神居て上は高天原を光さ下ハ葦原中國を照し眼は八咫鏡なせりと白しき即從神を三問とめ給ふ時と得目勝問さりき故天照大御神高御產巢日神の命以て天宇受賣神と汝は手弱女に在ども伊牟迦布神と面勝神なり故專ら汝往て吾御子の天降坐むじむる道と誰ぞ如此居るに問てよと詔ひき故問せ給ふ時に答曰く僕は國神名は後田毘古神也出居る故ハ天神の御子天降坐むと聞つる故に御前ニ仕奉むとて参向ひ侍ふと白すと白給ひき 参取日本書紀

一書古 天宇受賣命復問げらく汝先立行む乎抑我先立行むか對曰く吾先立て啓行む天宇受賣命復問曰汝は何處に到り皇孫命は何處に到り坐む對曰天神の御子は筑紫日向高千穂穗觸之峯に至り坐む吾は伊勢の狹長田五十餘里に到るも我を尋ね給へと白給ひき 爾日子番能邇々藝命天降

諸神

受賣命還詣て其狀を奏さき 日本書紀 爾天津日子番能邇々藝命と真床覆衾に裹奉り天磐戸を引開て天降と奉りき故此神を稱て天國饒石彦火瓊々杵命と申 日本書紀 於是天之石位と離れ天ハ八重多那雲を押分て稜威の道別知和岐 参取一書

且天降り坐時後田毘古神御啓行し天忍日命天津久米命二人背に天磐鞞を取負ひ臂に稜威ハ高靴を著手に天之波土弓天羽羽矢 按古事記 眞八目鳴鶴を副持又頭槍ハ劔と取佩て御前に立仕奉り 日本書紀 一天香語山命次に天神玉命此は高御產巢日神の子三島縣主等祖也其子天櫛玉命ハ小山連之祖其兒鳴建津身命ハ鳴縣主之祖也 参取新撰姓氏錄 天道根命は神御產巢日神五世孫紀伊國造川瀬造等之祖也 参取新撰姓氏錄 古天牟良雲命此は天曾已多智命の子天嗣杵命の子天鈴杵命の子天御雲命の兒度會神主等祖也 参取豐受禰宜補天

背男命此は天壁立命の子山代久我直等祖也天御陰命天斗麻彌命此ハ並天津日子根命の兒也天玉櫛彦命此ハ神魂命五世孫間人連之祖也 参取新撰姓氏錄 天湯

津彦命此は阿岐國造阿尺國造思國造伊久國造染羽國造信夫國造白河國造
佐渡國造波久岐國造等祖也天伊佐布魂命此は角凝魂命兒倭文連竹原等祖
也角凝以下據天表春命天下春命等三十二神各防護りて仕奉り○按本書載
新撰姓氏錄

十二神のうら疑らくは後人の造設と出る者二田物部當麻物部芹田物部馬
あると似り故今諸書と參考て此數神と擧ぐ

見物部横田物部島戸物部浮田物部巷宜物部疋田物部酒人物部○按本書一
田より作り酒人と須人に作ら恐らくは誤也田尻物部赤間物部久米物部狹

り故今異本及新撰姓氏錄に據て之を訂す

竹物部大豆物部肩野物部羽束物部尋津物部布都留物部經迹物部○按本書
住に作ら疑らくは住道と讀岐三野物部筑紫聞物部播磨物部筑紫費田物部

訛ならむ姑附て考と備ふ

凡二十五部共兵伏を帶て仕奉り舊事天の浮橋と宇伎士麻理蘇理多々志
果しと先に獲田毘古神の言とが如筑紫日向高千穂の久士布流峯と天降り

坐き日本書紀一於是皇御孫命高千穂峯より遊行時齊肉の空國頓丘より國

愈行去る吾田笠峯の御崎に到坐と長尾の竹島と登坐て其地を巡覽まして

詔曰此地は朝日の直刺國夕日の日照國也故此地を甚吉地と詔て國主事勝

國勝長狹神と召て問曰此地は誰國歟對曰此は長狹が住る國也然れども今

皇孫命に奉上らむ取捨御意の隨遊ばせと白しき及一書日本書紀故底津石根

と宮柱太知り高天原と氷木高知て坐き古事故其事勝國勝長狹神亦名鹽土

老翁又鹽椎此は伊邪那岐大神の御子也日本書故爾皇御孫命天宇受賣命に

詔曰此御前に立て仕奉りと獲田毘古大神をば専ら顯し申せと汝送奉り亦

其神の御名は汝負て仕奉れと詔給ひき古事即天宇受賣命獲田毘古神の所

乞れ隨に侍送りき日本書是以獲女君等其獲田毘古之男神の名を負て女と

獲女君と呼ぶ事是也古事記日本故此獲田毘古大神ハ宇治土公氏の祖也延

儀式倭後爾天兒屋命皇御孫命の御前に奉仕て天忍雲根神と天の二上に奉

水取之政

志國の水に天都水を加へて奉らむと事教給ひと依て天忍雲根神天の浮

大嘗之始

雲に乗る天の二上^{ニノノカミ}に上坐^{ノボリカ}して神漏岐神漏美命^{カミヌケノカミ}に御前に白せば、天の玉櫛^{タマノコ}を事依し奉る。此玉櫛^{タマノコ}を刺立て、夕日^{ユフヒ}より朝日照^{アサノヒ}に至るまで、天津詔戸^{アマノノミコト}の太詔刀言^{タマノミコト}を以て告ぎ、如此^{コノカド}告ば、麻知波^{マチハ}弱^{ヨク}垂^{タリ}に由都^{ユツ}五百^{イハ}篋^セ生^ナ出^デる。其下^{シノ}より天の八井^{ヤハ}出^デむ。此^{コノ}を持^テて、天津水^{アマノミヅ}と所聞食^{ソコノミ}と事依し奉りき。於是^{コノトキ}天兒屋命^{アメノコノヤノカミ}如此^{コノカド}依奉りき。隨^ツよ、所聞食齋庭^{ソコノミ}の稻穂^{イネノホ}と太兆^{タシホ}の卜事^{ウラナヒノコト}を持^テて、仕奉りて、悠紀主基國^{ユキノミ}と齋定^{イハヒ}る。物部^{モノベ}の人等^{ノヒト}酒造^{サケヅク}兒酒波^{コノサカベ}紛走^{マギマシ}、灰燒薪^{ハイヤク}探相^{サグマシ}、稻實^{イネノミ}公等^{ノミ}大嘗^{オホノミ}の齋場^{イハヒノミヤ}と持齋^テり參來^{マシ}て、由志利伊都志理^{ユシリイツシリ}持^テ恐^{コソ}み、恐^{コソ}みを清まはりに奉仕^{ツカヘ}て、月内^{ツキノミナ}に日時^{ヒトキ}を撰定^{マシ}め、獻^{マシ}る。悠紀主基^{ユキノミ}の黒木^{クロキ}白木^{シロキ}の大御酒^{オホノミサケ}と皇御孫^{ミコノミ}命^{ノカミ}の天都御膳^{アメノツツノミ}の長御膳^{ナガノミ}の遠御膳^{トホノミ}と、汁^{シユ}とを實^ミに、亦^モ丹^ニの穂^ホと所聞食^{ソコノミ}て、豊明^{トヨアカリ}と明坐^{アカリカ}して、天都神^{アメノツツノカミ}の壽詞^{スサノコト}と稱辭^{ネガフコト}定め奉り、亦^モ皇神等^{ミコノカミ}に、千秋^{チウキウ}五百^{イハ}秋^{アキ}に相嘗^{サヘ}に相宇^{サヘ}豆^{マメ}乃^ノ比^ヒ奉り、堅磐^{カタハ}常磐^{トコノハ}と齋奉り、伊賀志^{イハシ}御世^{ミヨ}の榮^{サカ}とめ奉り、此年^{コノトシ}より始^{マシ}て、天地^{アメノツチ}日月^{ツキノヒ}と共に、照^スし明^カらる。御坐^{ミカ}む事に、本未^{ホト}不傾^{カタ}茂槍^{モシロ}の中^{ナカ}執持^{ツク}て奉仕^{ツカヘ}る。壽詞^{スサノコト}と稱辭^{ネガフコト}定め奉り給ひき。台引^{ダイヒキ}記^キ天^{アメ}

神壽^{カミノスサノコト} 此は大嘗祭の御政の本也。天神壽^{カミノカミノスサノコト} 亦諸部之神等天津神の初に隨に、皇孫^{ミコノミ}命^{ノカミ}に陪從^{トモ}奉り、歷世^{コトノツキ}に相承^{サヘ}て各其職^{ツカサ}に供奉^{ツカヘ}き。古語^{コノコト} 於是天津日高日子番能^{アメノツツノヒノカヒコノフネノカミ}遇^{アヒ}

遇^{アヒ}藝能^{ゲノミ}命^{ノカミ}笠狹^{カサノヤ}御崎^{ミサキ}と遊幸^{ユウケン}と時に、麗美^{ウツクシ}少女^{メノコ}の遇^{アヒ}へる。誰^{タレ}女^{メノコ}ぞと問^ト給^ヒへば、答^{コタヘ}

白^{シロ}給^ヒはく、大山津見神^{オホノヤマツミノカミ}の女^{メノコ}名^ナ木花^{キノハナ}之^ノ佐久夜毘賣^{サクヤヒメ}と白^{シロ}給^ヒひき、復^{イタドシ}汝^ニ兄弟^{ケイテイ}ありや

と問^ト給^ヒへば、我^{ワレ}姊^{イモ}石長比賣^{イシナガヒメ}在^アり、と白^{シロ}給^ヒひき、故^{ナリ}其^ノ少女^{メノコ}を其^ノ父^ノ大山津見神^{オホノヤマツミノカミ}に乞^{コヒ}

に遣^ツげし時^{トキ}、大歡^{オホノカシ}て、其^ノ姊^{イモ}を副^ツて、百取^{ヒャクトル}の机代物^{ツクシノカタモノ}を持^ツて、奉^{マシ}出^デと給^ヒき、故^{ナリ}爾^ノ其^ノ

姊^{イモ}は甚醜^{オホノカシ}に因^リて、見^ミ畏^{オソ}て返^{マシ}送り給^ヒて、唯^{タダ}其^ノ弟^{ケイ}木花^{キノハナ}之^ノ佐久夜毘賣^{サクヤヒメ}を留^{トモ}て娶^{ムス}坐^カき

爾^ノ大山津見神^{オホノヤマツミノカミ}ハ、石長比賣^{イシナガヒメ}と返^{マシ}給^ヒへるに因^リて、其^ノ甚^{オホ}恥^{カシ}給^ヒひ、其^ノ石長比賣^{イシナガヒメ}も恥^{カシ}

恨^{ウラミ}み、唾^{ツバ}泣^ナて、皇孫^{ミコノミ}命^{ノカミ}を詛^ツ言^{コト}奉^{マシ}りき。此^ノ世人^{コノヒト}ハ命^{ノカミ}短折^{ミカシ}縁^ノ也^{ナリ}。古事記^{コノコトノシ}日本^{ニッポン} 故^{ナリ}後^ノと木^ノ

花^{ハナ}之^ノ佐久夜毘賣^{サクヤヒメ}命^{ノカミ}の生^ナ坐^カる御子^{ミコ}ハ、名^ナハ、火須勢理^{ヒスセリ}命^{ノカミ}亦^モ名^ナ火進^{ヒスシメ}命^{ノカミ}又^モ火照^{ヒテ}命^{ノカミ}亦^モ

名^ナ火闌降^{ヒランカド}命^{ノカミ}次^ニ生^ナ坐^カる御子^{ミコ}ノ名^ナハ、火遠理^{ヒト}命^{ノカミ}亦^モ火夜織^{ヒヨオリ}命^{ノカミ}亦^モ名^ナ天津日高日子^{アマノツツノヒノカヒコ}

穗^ホ々^々手^テ見^ミ命^{ノカミ}凡^ニ二柱^{ニハシ}坐^カき、日本書紀^{ニッポンノコトノシ}一書^ノ天津^{アマノ}以下^ノ古事記^{コノコトノシ}○按^ニ日本書紀^{ニッポンノコトノシ}火闌降^{ヒランカド}

命^{ノカミ}次^ニ彦火^{ヒコノヒ}々^々出^デ見^ミ尊^{ノミ}、次^ニ火明^{ヒノアカリ}命^{ノカミ}又^モ一書^ノに、火酢芹^{ヒソセリ}命^{ノカミ}

日本書紀^{ニッポンノコトノシ}一書^ノ天津^{アマノ}以下^ノ古事記^{コノコトノシ}○按^ニ日本書紀^{ニッポンノコトノシ}火闌降^{ヒランカド}

海幸山幸

次火明命、次彦火々出見尊、亦名火折尊とある。火明命は、邇々藝命の御兄なれば、此に在るは、謬也。又一書に、火明命、次火夜織命、次彦火々出見尊とある。火明命を謬り、火夜織命、火遠理命と同きは、此も謬也。又一書に、火明命、次火進命、次火折尊、次彦火々出見尊、四柱とある。火折尊、彦火々出見尊の別名を擧ぐ二神と云。古事記にも、火明命を載るは、是時神吾田鹿葦津姫卜定田謬也。故今日本書紀一書に因て、其謬誤を訂せり。是時神吾田鹿葦津姫卜定田と狹名田と號け、其田稻以て、天甜酒を醸し、其名田の稻を飯と炊、新嘗を給ひき。此神吾田鹿葦津姫は、即佐久夜毘賣也。日本書後久しく坐て、日子番能邇々藝命崩坐き、因日向埃之山陵に葬奉る。日本書紀、爾火須勢理命、海佐知毘古として、鱒、麁物、鱒、狹物を取給ひ、火折命は山幸毘古と云、毛鱸物、毛柔物を取給ひき。爾其兄、雨零風吹毎に、其利を得受、弟は雨零風吹と云、其幸成りき。爾火須勢理命其弟に謂けらく、吾試に汝と各に幸易てむと云き。故火遠理命許諾給ひて、火須勢理命は弟の幸弓矢を持、山に入て獸を覓、終に獸の乾迹だも見給は受、火折命、兄の幸釣を持て、海に入て魚釣とに都一魚も得給は、其釣とこへに海と失給ひき。於是火須勢理命悔て、弟は弓矢と還て、其釣と乞て、山幸も曰が佐知々々、海幸も曰が佐知々々、今は各佐知返とむと云時、其弟火折命、汝の釣は海と失てきと詔へども、其兄強に乞徴き。故其弟御佩れ、十拳劔を破り、五百鈎を作、償へども取らざ。又千鈎を作りて償へども受ぞ。猶りの本鈎を得むとぞ云け。於是其弟海邊に往坐て、低仰愁吟給ふ時に、鹽椎老翁來て、我汝命の爲に善議せむ。復勿憂坐と云て、無間勝間之小船を造り、其船に載奉りて、綿津見神の宮に渡志奉りき。爾海神自ら出見。此人は天津日高の御子、虚空津日高と坐りと云。即内に入て、百取机代物を備、御饗と、其女豐玉毘賣と娶奉りて、天神の御子此間に來坐。故は奈何と問奉き、故其大神に備に其兄は失と、鈎を責れ、狀を語給ひき。是以海神悉大小魚等と召集て、口女の口を探し、失と、鈎を得とりき。故海神制けらく、今より以往、餌を勿吞と、天神の御子の饌に勿預り、と云き。即口女魚と御饌に進らざると、此其緣也。於是火遠理命、豐玉毘賣命に娶て、其國に留住

綿津見神

て、其釣と乞て、山幸も曰が佐知々々、海幸も曰が佐知々々、今は各佐知返とむと云時、其弟火折命、汝の釣は海と失てきと詔へども、其兄強に乞徴き。故其弟御佩れ、十拳劔を破り、五百鈎を作、償へども取らざ。又千鈎を作りて償へども受ぞ。猶りの本鈎を得むとぞ云け。於是其弟海邊に往坐て、低仰愁吟給ふ時に、鹽椎老翁來て、我汝命の爲に善議せむ。復勿憂坐と云て、無間勝間之小船を造り、其船に載奉りて、綿津見神の宮に渡志奉りき。爾海神自ら出見。此人は天津日高の御子、虚空津日高と坐りと云。即内に入て、百取机代物を備、御饗と、其女豐玉毘賣と娶奉りて、天神の御子此間に來坐。故は奈何と問奉き、故其大神に備に其兄は失と、鈎を責れ、狀を語給ひき。是以海神悉大小魚等と召集て、口女の口を探し、失と、鈎を得とりき。故海神制けらく、今より以往、餌を勿吞と、天神の御子の饌に勿預り、と云き。即口女魚と御饌に進らざると、此其緣也。於是火遠理命、豐玉毘賣命に娶て、其國に留住

纏綿篤愛て、日に三年と云に還坐せしむる時、海神其鈎を取出て、潮盈珠、潮涸珠を副て、此鈎を其兄に給はむ時、其詛言又其珠を用ふる法を教給て曰く、如此して惣苦給はば、其兄自然に當伏なむと白給ひき。一書古事記及復白と曰く、天神の御子の吾處に來坐る欣慶、何日も忘れむ皇孫命、八重の隈路を隔じ、時々相憶ほと坐て、勿棄置給ひそと白と、上國に送出し奉りき。故本の宮に還坐て、備に海神の教言に如くして、先其鈎を與へき。故其より以後、稍貧とくなりて、更なる荒心を起して、追來攻むとぞ。是時は鹽盈珠を出して、溺らし其愁請せば、鹽涸珠を出して救ひ斯して、惣苦給ふ時、其火須勢理命弟命の神徳坐事を知て、稽首白とく、今より以後、吾子孫の八十連属汝命の御垣邊を離せ、受晝夜の守護人と爲て仕奉らむと白と、故今に至るまで、是苗裔の隼人等、天皇命に宮牆に傍を離れ受、吠狗に代りて、又其溺れし時、種種の態絶せ仕奉る。一書古事記故、此火須勢理命は吾田君阿多隼人、大角隼人等祖也。一書古事記

古事記新於是豐玉毘賣命自參出て白給はく、妾既く妊身を今産べき時に至りぬ。此念ふに、天神に御子を海原に生奉るべきに非受。故參出來つと白と給ひき。爾即其海邊の波激る鴨羽を茸草にきて、産屋を造りき。於是其産殿未た暮合ぬに、御腹忍難くなり給にけし、ハ産殿に入、坐き爾御子生坐むとぞ。是時其日子夫に、吾を勿看給ひそと白と給ひき。於是其言を奇とと思ほとて、其方と産給ふを竊伺し給ひしらば、豐玉毘賣命其を心恥しと思ほして、其御子を生置て、妾極ハ海道を通と往來と欲しを、吾形を伺見給ひしが、甚作事と恨給ひき。古事記、爾に火遠理命就坐て御子の名は何と稱ば可と問給へば、日子波限建鴨草茸不合命と號給へと言訖て、即海坂を塞て、海郷に還入坐き。日本一書、參取故是、日子波限建鴨草茸不合命の生坐る時、天忍人命陪侍供奉て、古事記、簾を作りて、蟹を掃ひ、仍鋪設を掌き、故遂に職號とて、蟹守と云ふ。是は掃守連等が祖也。古語又他婦人を取、乳母、湯母、及飯、噉湯坐と爲、諸部を備行

養奉りき此世之乳母と取て兒を養本縁也日本書紀亦子武位起命此命の子推

根津彦命此は大和國造大和直久比岐國造明石國造青海首等之祖也舊事本紀參取

日本書紀新然後にハ豐王毘賣命其伺給三情を恨つとも戀情之得忍給は受

撰姓氏錄

て其御子を養し奉る縁之依て其弟玉依毘賣に附て歌をなを献りけり日本

書紀一書ハ豐玉姬命其兒を自抱て去給ひ久くありて天孫の子此其歌云

海中に置奉るへきに非すと云々玉依姬に抱しめて送出奉りき

阿加陀麻波表佐閉比迦禮柿斯良多麻能伎美何余曾比斯多布斗久阿理祁理

○日本書紀一書云阿加陀麻廼比加理波阿理登比登爾其比古運答歌曰意伎

波伊閉柿伎美賀余曾比斯多布斗久阿理祁理

都登理加毛度久斯麻廼和賀韋泥斯伊毛波和須禮土余能許登基登通古事故

日子穗々出見命ハ高千穗宮に五百八十歳坐て崩坐き御陵即其高千穗山の

西ニあり古事記天津日高日子波限建鵜草葺不合命其後王依毘賣命に娶

て生坐る御子の名は五瀬命亦彦五瀬命と申と次に稻水命亦彦稻飯命と申

亦名は神倭伊波禮毘古命凡四柱坐き日本書紀及後久く坐て日子波限建

鵜草葺不合命西州の宮に崩坐き故日向の吾平山上の陵ニ葬し奉る日本書紀

神祇志料卷之一終

正誤

○凡例 一張右二行 七行有下あ 八行わ 同張左八 二張右四行
けノ下脱ら り二字行 ハは 行澄ハ證 緑ハ縁

同張左九 十五張左十一十二 ○引用書目 行姓靈ノ姓ハ性 ○本文 一張右十一行速秋

行延ハ廷 行延ハ廷 行姓靈ノ姓ハ性 津日子ハ彌都波能

賣 二張左四行 三張右九行 六張右一行 同張十行天 七行左

胃ハ胃 本下脱じ 別ハワケ 戸ハ大戸 四行二

ノ字 九張十一行 十張右六行 同七行注 同張左四行注 十二

行 注盃ハ蓋 飽下脱昨 開下脱嚙 二ノ咲ハ咩 張右

六行十行左十 同九行注 同十一行 十三張左一 同七行握 十

一行齧ハ齧 端ハ端 御下脱鬢 行怒ハ怒 ハカツ 四

張右二行受 同四行 十五張右一 同七行驚 同張左十一行 十

ハ迄下同之 溝ハ慍 行電ハ雷 ハワソ 祝ハホザキ 六

張左十一行所 十七張左十 十九張右四行注按摩ノ 同十行 同張

行ハシワザ 行殖ハウエ 摩ハ一手一ノ一ハ摩 岸ハ峯 左十

行大ハ 廿張右五 同八行 廿一張左十 同十一行 廿二張右二
オホ 行也ハエ 行注づハ迄 多ハタ 行注服ハ股

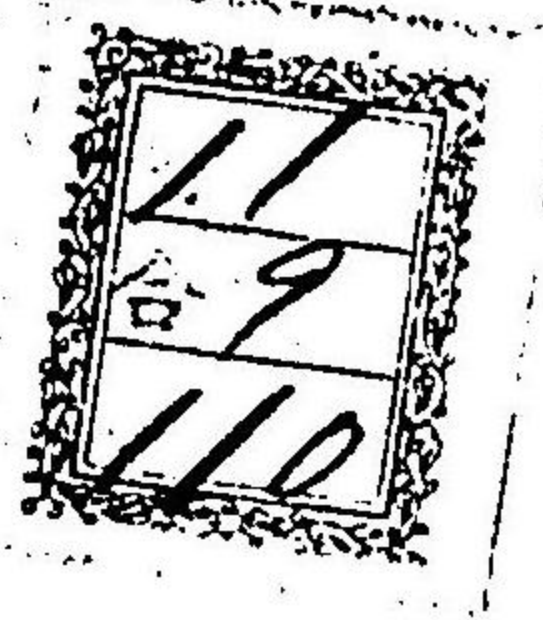
同張左二 廿三張左二 廿五張右九 同十一行 同張左二行
行遅ハチ 行比ハ此 行端ハ端 行注ハク 五十ハイ

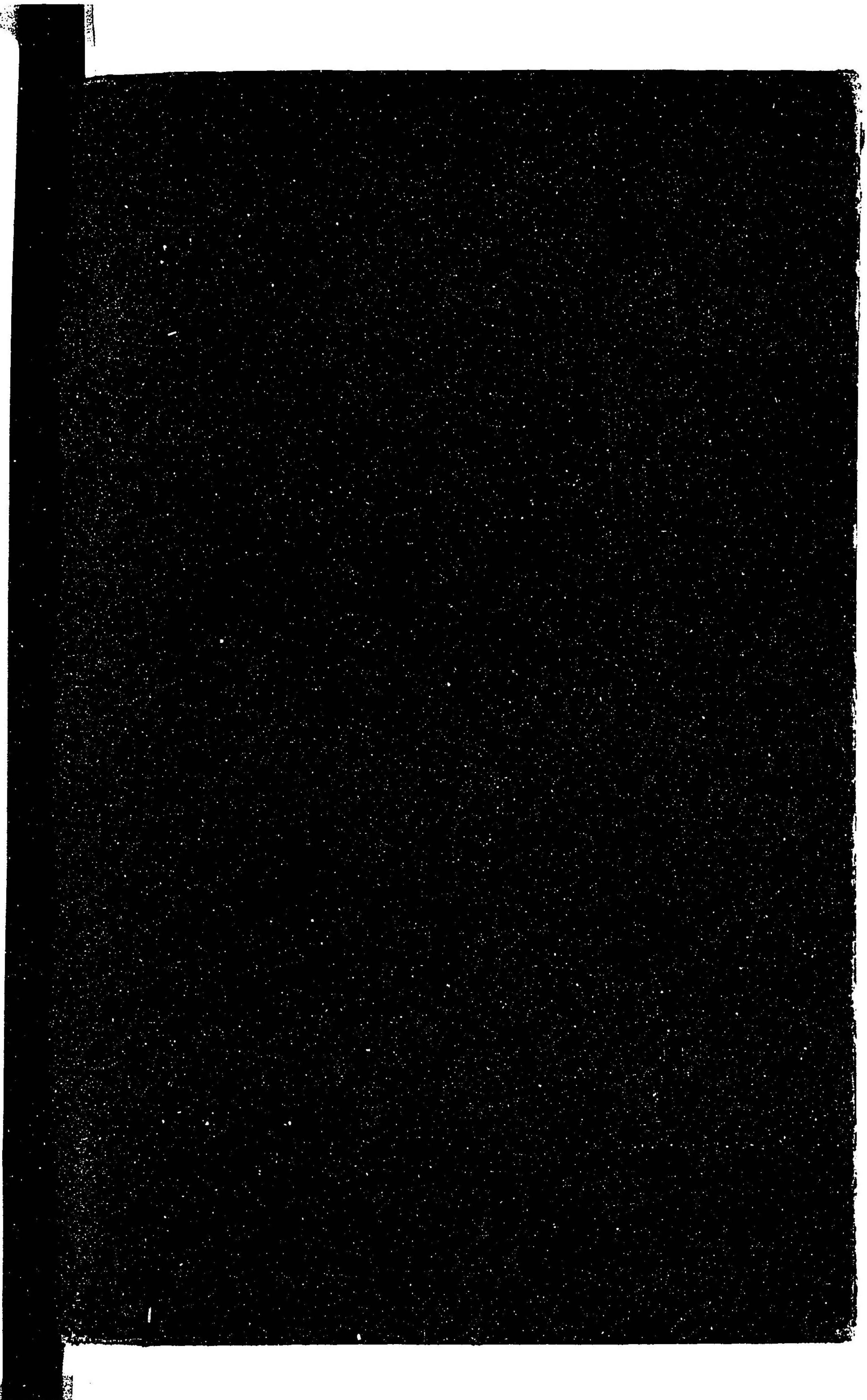
同十一行熊罥 廿七張左十二 廿八張右一 同張左六行七行 同二
ハクマワニ 行弱ハヨワ 行事ハワザ 注二ノ爾ハ壘 行注

鏡ハ 廿九張右十二行大祭 三十一張左 同八行 同張九行 同
饒 ハオホミマツリ 六行紛ハ粉 都ハツ 堅ハカキ 十

二行注引記 三十二張左四行 同八行弟 三十三張右七 同張九行
ハ記引 其名ハ淳浪 ハイロト 行机ハツクエ いハハ

三十四張右二 同行生 同張左二 同三行 同八行 同十二行
行此下脱と ハウミ 行岐ハ岐 王ハ玉 和ハワ 沿ハ沿





014153-001-4

11-110

神祇志料

栗田 寛/著

1冊

M9-20

ABB-0431

